

## いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」

### の問題について 附論、宇野教授の反駁に答える

三宅義夫

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題は古くからいくたびか取上げられて来たがしかし正しい解決を見るにいたらずに混乱を重ねていた問題であつて、マルクスによつてはじめて解答を与えうるにいたつたものである。本誌前々号および前号においてマルクスの利子生み資本について小論を記したさい右の問題は「この小論の課題として」ところと直接には関係がないのでつとめてこれに触れることを避けてきた」(前々号末尾の註)と記しておいたが、いまここで、信用論(註一)にとっては決定的な重要性を持っているところの右の問題にたいして考察を行うこととする。ところでマルクスのこの解答は、下書きの形で書かれたものの中で示されているのであるが、今日にいたるまで正しく読み取られているとはいへないように見受けられる。これを編輯したエンゲルスは二箇所で長い書入れを挿み、この問題がいかに解決さるべきかを明確に説明しようと計っているが、このエンゲルスの説明もマルクスの与えている解答の一面だけを捉えているというかなり根本的な欠陥を持っており、したがってかなり根本的に訂正の要

があると考えられる。

本稿は、この問題にかんする右のような事情にかんがみ、まず、マルクスが諸所で述べている説明のいくつかを取り出し、若干の重複をいとわずそれらがそれぞれいかなることを説明しているかを明かにしようと試みたものである。あらかじめ注意を要することは、利子生み資本について正しく把握していることが前提として必要なのであって、これについては上記の「利子生み資本小論」において二三の謬見を批判することを通じて試みておいた（註二）。

（註一）前々号の拙稿の冒頭に記しておいたことをここに繰返しておく。——「第三巻第五篇の叙述は大きく分けると第二十一章から第二十四章までと、第二十五章から第三十五章までとの二つに分かれており、この前半四章において利子生み資本についての一般的な説明が、そしてつぎの十一章においてはこれに関連して、信用論が取扱われている。」

（註二）前号においては宇野教授の所説を見ておいたが、これにたいして教授は本誌に反駁を寄せて来られたので、それにたいするお答えを本稿の末尾に附論として附しておいた。

# 一

本論に入る前に問題が『資本論』のどこで論ぜられているかについて概観をえておこう。

第三巻第五篇の第二十六章「貨幣資本の蓄積。利子率に及ぼすその影響」においてマルクスは、一八五七年のイングラント銀行条例特別委員会でなされたノーマンの証言を見、ついでオーヴァストーンの証言を検討している（五四五八頁以下。——Ⅲは『資本論』の巻数、頁はインスティトゥート版のそれ、以下同じ）。この委員会でのオーヴァストーンの証言は、質問番号第三六四〇号から第四二四八号に及ぶものであるが、マルクスの抜萃および評言もまた相当地に詳細であって、この章のほとんど大部分がこれで占められている。ここで、とくに第三七二九号のところで、最初にこの

問題が取扱われている（Ⅲ四六四—五頁）。すなわち、「割引とはなんのことであろうか？　なぜひとは手形を割引に附すのであろうか？……もっと大きな資本を支配したいからである」というオーヴァーストーンの自問自答にたいしてマルクスは「まて！」として評言を挿み、ついでオーヴァーストーンは「割引を追加資本の貸付と同一視」しているとす。マルクスはいう、手形の割引は「すでにかれの手にある貨幣資本を一形態から他の一形態に置換えることにすぎない」と。つづいて、これにつづく諸証言を引いてオーヴァーストーンの「資本」観を見ている。とくに第三七四三号において、逼迫期において事業家たちの願はなにか、「かれらが手に入れようと目ざすのは資本ですか、それとも法貨ですか？」と質問されたオーヴァーストーンが、「かれらが目ざすのは、自分の事業を維持するために資本を支配することである」と答えていることにたいして、マルクスは、「かれらの目的は……支払手段を入手することである。かれら自身が総じてなんらの資本も持っていないとすれば、かれらは支払手段と同時にもちろん資本をも入手する」とし、また「恐慌を度外視しても、資本借用と割引との間には大きな区別がある」ことを重ねて強調している（Ⅲ四六七頁）。

ここでエンゲルスは、「ここにあって一つの注意を差挿んでおく」として書入れをし、「銀行業者が自分の取引先の手で現金で委ねるものは資本であるか、それともたんに貨幣——流通手段つまり通貨——であるか？　という混乱させる論争問題」、「この——根本的にはかんたんな——論争問題を解決するためには、われわれは銀行の取引先の立場に立つてみなければならぬ。銀行の取引先はなにを要求し、かつなにを入手するか、ということが問題なのである」とする。そしてエンゲルスは、無担保貸付の場合、担保付貸付の場合、手形割引の場合とに分けて、第一の場合には「貨幣のみならず貨幣資本をも入手する」、第二の場合には「貨幣の前貸であるが、資本の前貸ではない」、

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

第三の場合には「前貸の形態まで消滅する。行われるのは純粹な売買である」と説明する。そして「われわれはなお第二十八章で、もう一度この論題に立ちかえる」としている。——エンゲルスの書入れI（Ⅲ四六七—四七〇頁）。

マルクスはひきつづいて、資本と貨幣についての委員とオーヴァーストーンとの質疑応答を見、とくに第三七六三号で、「ここでわれわれは、ついに、かれが資本をなんと解しているかを知る」としている。なおエンゲルスは章末に、「資本の問題にかんするオーヴァーストーン概念混乱については第三十二章の終りでさらに述べられている」という註を附している（註）。

（註）現行『資本論』第三巻第五篇は「すくなくとも大部分は一八六四年および一八六五年に書かれている」（『資本論』第二巻のエンゲルスの序言）原稿から採られているが、マルクスは一八六五年八月十九日付エンゲルス宛の手紙のなかでつぎのように書いている。——「銀行制度等々にかんする一八五七年、一八五八年の議会報告書——それを僕は最近ふたび見なければならなかったのだが——のなかに表示されているところのまったくの背理については（von dem absoluten Unsinn）、君もまたあまり隔った考えを持っていないだろう。重金主義のように資本イコール金だ。その間には、A・スミスからのおすおすした思ひ出と、金融市場の囁言を『啓蒙された』諸概念と和解せしめようとする怖るべき試みとが、横っている。なかでもいまではついに死んでしまったマカロックが一番際立っている。この奴さんは公然とオーヴァーストーン卿からたつぷりと酒手を引き出していた。オーヴァーストーン卿の方はそれでまた『金融界の王者』たるにふさわしく万難を排して押られていなければならないのだ。これら一切の件にかんする批判は後日の著作のなかではじめてなされう。」（傍点—三宅）。

つぎにマルクスは、第二十八章「流通手段と資本。トタックおよびフライトンの見解」において、まずトタックについて（Ⅲ四八三—四九〇頁）、ついでフライトンについて（Ⅲ四九〇—五〇三頁）考察している。A・スミスに倣って「商人と商人との間の取引」と「商人と消費者との間の取引」とを区別し、「前者は資本の流通であり、後者は貨幣の流通である」（『通貨原理の研究』、三六頁）とするトタックの見解が批判される。——マルクスはいう、「区別は、事

実上、所得の貨幣形態と資本の貨幣形態との區別であつて、流通手段と資本との區別ではない」と。マルクスはさらに、なぜトックスがこのように流通手段と資本とを區別することに駆られたかを究明する。自己の銀行券を発行する銀行業者の立場に立つと、「たえず公衆の手にあつて（つねにちがつた銀行券から成り立つとはいえ）流通手段として機能するかれの銀行券の額は、かれにとっては紙と印刷以外なんらの費用もかからない」から、「かれの資本——自己資本であるか借受資本であるかを問わず——とは相異なる」という區別が生じる。また、「貨幣は、それが所得の貨幣形態として登場する場合には、むしろ本来の流通手段（鑄貨、購買手段）として機能することが多い」のになつて、「商業界の取引においては、貨幣は主として支払手段として機能する」といつた區別がある。また、「支出されるべき所得の分量は消費の範圍を表現し」、これにたいして「生産および商業において流通する資本量の大きさは再生産過程の範圍および速度を表現する」のであるが、繁榮期には前者の流通（流通Ⅰ）は決定的に膨脹するのにたいして、後者の流通（流通Ⅱ）は絶對的には膨脹するかもしれないが再生産過程の膨脹に比較すれば相對的には減少する、恐慌期には逆に、流通Ⅰは収縮し、流通Ⅱは増大する、というように両者は流通手段の量にたいして「相異なる作用をなし、また逆の方向にさえ作用する」という區別がある。トックスはこれらの區別を捉えて流通手段と資本とを區別することに駆られるのであるが、これらの區別は流通手段と資本との區別ではない。流通Ⅰと流通Ⅱとの區別のところでマルクスはいう、「通貨主義の諸君が二つの別々の事柄を混同しているという事情は、これらの事柄を概念的區別として叙述するための理由ではけつてない」と。

ついで、「資本の貸付にたいする需要と追加的通貨にたいする需要とはまったく別々のものであつて、両者が結びついていることはあまりない」（『通貨調節論』第五章の標題）とするフライトンの見解が批判される。フライトンは、

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

通常、通貨の追加供給を必要とするのは繁栄期であり、イングランド銀行に資本の前貸の要求が殺到するのは、主として不況期であるとする。マルクスはこれにたいし、「フラートンが挙げているような対立は正しくない」とする。そして、フラートンが、イングランド銀行の手持ちの有価証券が増加するような時期には同銀行の銀行券流通高が減少し、逆の場合にはこの逆だという現象は、いかなる銀行もそれにたいする需要をこえて銀行券の流通を増加させないということを示しているものであり、かつ、これをこえた前貸は銀行の資本から行われねばならぬということを示しているものであるとして、マルクスはいう、「資本なる言葉はこの場合、ただ銀行業者的意味でのみ使用されているのであつて、銀行業者は自分のたんなる信用よりも多くのものを貸付けることを余儀なくされている、ということの意味する」と。ついでマルクスは、貸付にたいする需要がいかにして流通手段の総量を増加せしめないで充たされうるかについて考察し、フラートンが資本にたいする需要だとしているものが貨幣資本の立場、銀行業者の立場から見ての資本を求める需要であること、不況期には購買手段としての銀行券の流通は減少するが支払手段としての銀行券の流通は増加することを指摘する。

ここでマルクスは、「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支払手段にたいするたんなる前貸と看なされるべきであるか？」(Ⅲ四九七頁)と問題を出している。——マルクスによる問題提起Ⅰ。しかしエンゲルスは、「ここに続く原文の文章は関連が理解し難いので、括弧の終りまでは編纂者があるたに書き改めたものである」という註を入れ、「これについては三つの場合が研究されねばならない」として、さきに四六七—四七〇頁で与えたとほぼ同じ説明を与えている。——エンゲルスの書入れⅡ(Ⅲ四九七—九頁)。

マルクスはさらに数頁後のこの章の終りに近いところでつぎのように問題を出している。「なお、つぎのような質

問が生じうる。—— いったい、かかる逼迫期に欠けているのはなんであるか？ 資本であるか、それとも、支払手段としての規定性における貨幣であるか？ そしてこれは周知のように一つの論争問題である」(Ⅲ五〇二頁)と。—— マルクスによる問題提起Ⅱ。そして、金が流出するかぎりでは、要求されるものは「國際的支払手段としての規定性における貨幣」であり、これは貨幣(一般的な世界市場商品としての)の形態での資本であって、「この場合には、支払手段としての貨幣にたいする需要と資本にたいする需要との間の対立は存在しない。対立は貨幣の形態における資本と商品の形態における資本との間に存する」とし、金(または銀)にたいするこうした需要を別とすれば、また「穀物飢饉、棉花飢饉などのような異常な事情」を別とすれば、恐慌期には資本が不足しているとはいえない、「いずれにしても逼迫の原因は商品資本の欠乏ではない」とし、「われわれはこの問題に後段で立ちかえる」としてする(註1)(註1)。

(註1) このように、あらためてここで問題を出しているのであるが、なお解決を十分つけずに後段に譲っている。しかしこの章のこれまでのところにおいても、金の流出について、「要求されるのは資本としての資本ではなくて、貨幣—— 一般的な世界市場商品たる形態での貨幣—— としての資本である」、「それが通貨主義者たちの主張するとき国内的流通手段の問題ではないということは、けっして、フラートンその他の考えるように、それがたんなる資本問題だということを証明するものではない。それは、國際的支払手段たる形態での貨幣の問題である」といった考察をしている(Ⅲ四九四—七頁、傍点原文のまま)。また、恐慌期に事業家たちが入手しようと求めるものが支払手段であることは、オーヴァストーンを論評したさいに指摘していたところであり、いまの章でも、すでに見たようにトタックのところでも、恐慌期における流通Ⅰと流通Ⅱとの関係について触れ、またフラートンのところではこれを扱ったとえば、「恐慌期に前貸が借りられるのは、支払うためであって買うためではなく、過去の取引を片づけるためであってあらたな取引を開始するためではない」(Ⅲ五〇一頁)という注意を与えているのである。またそこでは、「銀行資本の払底および銀行資本にたいする急迫した需要が現実資本の減少と混同され

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

る。現実資本はかかる場合には、反対に、生産手段および生産物の形態で過剰に存在していて市場を圧迫している」（Ⅲ五〇〇頁、傍点原文のまま）ということも指摘されている。つまりマルクスは上のように答えるべきであるというこの程度の指摘であればすでにいく度もくり返しているのである。そしてこのようなくり返しは、オーヴァーストーンが、またトタック、フーバーが、貨幣と資本との関係についてそれぞれ誤った見解を示しているもので、それを論評する上から当然にそうなるというほか、やはりこの原稿がこのままの形で発表するために書かれたものでないことにもよるのであろう。

（註二）エンゲルスは一八八九年七月四日付ダニエルソン宛の手紙のなかでつぎのように書いている。——「銀行制度および信用にかんする篇は非常に困難です。指導原理は十分に明かに示されていますが、文章の脈絡全体は、読者がこの対象にかんする文献の主要著書——トタックやフーバーのごとき——を十分に知っていることを前提としている、といった状態にあります。そして、だが、一般にはそうでないから、多くの註釋等々が必要であるでしょう」と。『資本論』第二巻はマルクスの死（一八八三年三月）から二年後の一八八五年五月に出たが、第三巻はそれからさらに約十年後の一八九四年十月にはじめて刊行されるにいたった。この遅延の主な原因は、第三巻のエンゲルスの序言や編輯当時の諸書簡に見られるように、諸々の外的事情を別とすると、この第五篇の編輯がすこぶる困難であったことであつた。

そこでつぎに「後段で」いかように「立ちかえ」っているかを見ると、つぎのごとくである。すなわち第三十章「貨幣資本と現実資本Ⅰ」の冒頭で、「われわれが信用制度にかんしてこれから近ごろとする比類なく困難な諸問題はつぎのものである」とし、その二として、「貨幣払底すなわち貸付資本の不足は、どの程度まで、現実資本（商品資本および生産資本）の不足を表現するか？ それは他面、どの程度まで、貨幣それ自身の不足、すなわち流通手段の不足と一致するか？」（Ⅲ五二〇頁）と問題を出している。——マルクスによる問題提起Ⅱ。

これにたいする答はたとえばつぎのようになされている。

「各人が売ろうとしても売りえなく、しかも支払をするために売らねばならぬところの恐慌そのものにさいしては、



……自己の再生産過程で阻止されている資本の分量が、ちょうど信用払底も最大（したがって銀行信用にあっては割引率が最高）である場合に最大である。……だから、かかる状態を生産的資本の不足のせいにするほど誤ったことはない。……生産的資本の現実の不足が云々されるのは、すくなくとも資本制的に発達した諸国民のもとでは、ただ、一般的凶作——主要食糧のであれ、きわめて重要な産業的原料のであれ——の場合だけである」（Ⅲ五二七—八頁、傍点—三宅）。

「恐慌期に支払手段が不足するということは、自明のことである。……再生産過程の全関連が信用に立脚しているような生産制度のもとでは、信用が突然に停止されて現金払しか通用しなくなれば、あきらかに恐慌が——支払手段を求める激しい殺到が——生じるにちがいない」（Ⅲ五三四頁、傍点—三宅）。

また第三十二章「貨幣資本と現実資本Ⅱ」のところで。——「恐慌期には、貸付資本にたいする需要したがって利率がその最高限度に達する。利潤率、したがってまた産業資本にたいする需要は消滅したも同然である。かかる時期には、各人はただ支払をするためにのみ、すでに負っている債務を果すためにのみ、借金する。これに反して、恐慌後の景気回復期には、買うために、そして貨幣資本を生産的または商業的資本に転形するために、貸付資本が要求される」（Ⅲ五五八頁、傍点—三宅）。

「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以上の何ものでもない。——購買手段としての貨幣にたいする需要ではけっしてない。この場合、利率は非常に昂騰しうるのであって、そのことは現実資本——生産資本および商品資本——が過剰に存在するか欠乏しているかにかかわらない。支払手段にたいする需要は、商人や生産者たちが確かな担保物を提供しうるかぎりには、貨幣への転態可能性にたいするたんなる需要であ

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について。

る。そうでないかぎり、つまり、支払手段の前貸がかれらに貨幣形態を与えるばかりでなく、かれらに不足している支払のための——形態のいかんを問わず——等価物を与えるかぎりには、支払手段にたいする需要は貨幣資本にたいする需要である。これにこそは、通説の両面が恐慌の判断にさいして正鵠をえ、且つ間違えている点である。……」

(Ⅲ五六一頁、傍点原文のまま)。

この最後の文章は第三十二章の終りに近いところに見出されるが、マルクスはここでほぼ纏った形で問題にたいしての一応の結論を与えている、と見受けられる(註)。

(註) 第三巻のエンゲルスの序言によってマルクスの原稿自体の構成を見ると、第三十一章に採り入れられた部分と第三十二章の部分との間には、『混乱』と題する長い一篇があった。これは「一八四八年および一八五七年の恐慌にかんする議会報告書」とエンゲルスは記しているが、おそらく一八四八年の「商業的窮境」にかんする、および一八五七年の「イングラント銀行条例」にかんする議会報告書のことであろう——からの抜萃から成っており、マルクスはここに「貨幣と資本との関係にかんする当時行われていたほとんど一切の見解」を登場させ、「金融市場ではなにが貨幣でありなにが資本であるかということにかんする混乱」を批判的かつ諷刺的に取扱おうとした、とされている。こういった構成上の点も、上の文章がいくたびか提起してきた問題にここで一応の結論的叙述を与えていると見受けられることと照応しているように思われる。

なお、すでに見たように第二十六章の末尾にエンゲルスは「資本の問題にかんするオーヴァーストーン概念混乱については第三十二章の終りでさらに述べられている」という註を附していたが、第三十二章の註九でマルクスは、「オーヴァーストーンは(第二十六章を見よ)たえず「資本」と「貨幣」との間で混乱をきたしている。……オーヴァーストーンの矛盾のつづきはさらに後段で」(Ⅲ五五四頁)として、五五九頁以下で商品にたいする需要と貸付資本にたいする需要とを同一視しようとしている点を働き、そのなかでつぎのように、オーヴァーストーン的全証言の持つ客観的意

義についてまさに正鵠を射た矢を放っている。すなわち、「オーヴァーストーン氏の試み全体は、貸付資本の利害と産業資本の利害とを同一のものとして叙述することに存するのであるが、他方、かれの銀行条例は、まさに、これらの利害の相違を貨幣資本の利益のために利用することを目当てにしているのである」(Ⅲ五五九頁)。「オーヴァーストーンは狡猾にも、利子率の市場率は(貸付)資本の需要供給によって決定されるという平凡な命題を、貸付資本は資本一般と同一物だとなすかれ独自の仮定とごっちゃにし、そしてかくすることによって、高利貸を唯一の資本家たらしめ、高利貸の資本を唯一の資本たらしめようとするのである」(Ⅲ五六〇頁)と。さきに挙げた結論的叙述はこれにつづく。 (註1) (註11)

(註1) そしてそれにつづいて全信用制度の窮極の軸点としての金、資本制生産のもとにおける金の意義について一言されている。なお、「危機にさいして金屬的基礎を維持するためには現実的富のいかに大きな犠牲をも必要であるということは、トックによってロイド・オーヴァーストーンによってと同様に認められている。……啓蒙された経済学は……銀行制度を取扱うとなると、一切が逆転して、金銀は資本それ自体となり、その維持のためには資本および労働の他の形態はいずれも犠牲に供されねばならぬこととなる」(Ⅲ六二〇頁)。さきに掲げたエンゲルス宛の手紙のなかで「まったくの背理」といっているのにかかる資本制生産の基礎上で必然的に生じる現実における背理、それを反映する背理した意識という意味なのであって、たんなる馬鹿々々しさという意味ではない。

(註11) 貨幣資本にたいする需要と現実資本にたいする需要とを同一視するオーヴァーストーンの資本観については、エンゲルスによつてこの後の諸章として取纏められたところにおいても触れられているが、問題が『資本論』のどこで論ぜられているかについての一応の概観としてはもはや以上にとどめてよいであろう。ただ一つ終りにマルクスの皮肉屋ぶりを。——「ケイリ」(これはアトウッド派の人であつて、一八五七年の銀行委員会でオーヴァーストーンに上掲の質問をしていた「引用者」がオーヴァーストーンの資本観について出している質問にたいするチャプマンの応答はなかなかよい (Chapman) ——「第五三一五号。本委員会で陳述されたところによると、一八四七年のような逼迫期に求められるのは貨幣ではなくて資本だということ

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

三八

すが、それについての御意見はどうでしょうか——おっしゃることが分りません。われわれが取扱うのは貨幣だけです。あなたの云われる意味が分りません」(Ⅲ五八四頁)。

『資本論』においては以上のごとくであるが、これよりさき「一八六一年八月から一八六三年六月までに書かれた二十三冊から成る四折り版一四七二頁の『経済学批判』という原稿」(『資本論』第二卷のエンゲルスの序言)から採られた現行『剰余価値学説史』においても、第三卷第七篇第五章「剰余価値の外面化」の章の末尾でやはりこの問題が附加的に——ではあるが、しかしほとんど十分に——取扱われている。なぜここでは附加的に取扱われているかという、この第七篇はもっぱら利子生み資本論をテーマとするものであったからである。(註)

(註) 附言しておく、周知のように、現行『経済学批判』(一八五九年一月)の末尾をなす「流通手段および貨幣にかんする諸学説」の終りのところでも、「最大の国民的規模での実験による、この銀行立法(一八四四年および一八四五年のイングラント銀行条例)の不名誉な失敗——理論的ならびに実践的——は、信用論において(in der Lehre vom Kredit)はじめて叙述されうる」(インステイトゥート版「一八五頁」とし、またそこで、その批判者たるトットク、フラートン等による流通手段と區別しての貨幣と資本との混同についても言及している。このリカードの貨幣価値論乃至通貨主義を批判しているマルクスの文章はエンゲルスによって第三卷第五篇の「通貨主義と一八四四年のイギリス銀行立法」の章の冒頭と末尾とに引用乃至採入れられている。なおここで指摘しておきたいことは、本稿の問題はイングラント銀行条例を直接に取扱っているのではないがやはり同様に「信用論」の問題であること、そしてこのように「信用論」の問題が現行『資本論』のなかに組込まれていることである。このプランの点については別稿で詳論するが、さしあたり本誌前々号の拙稿「利子生み資本小論」の冒頭の註三を併せ見られたい。

ここで本論に入るが、行論の順序は、まずオーヴァーストーンについてのマルクスの論評を見、ついでこの論評と内容的に直接関連しているマルクスの他の箇所での説明を二三見、ついでトゥック、フラートンについてのマルクスの論評を見、終りにエンゲルスが与えている二つの書入れに言及することとする。なお余裕があれば、補論として、この問題についての従来の理解の二三について検討を試みておくこととしたい。

まずオーヴァーストーンについて。——その前に一言、オーヴァーストーンが概してどういった考え方をしているかをしるしておこう。オーヴァーストーンは、資本とは貨幣資本——オーヴァーストーンが自由にしているような——のことであると考える。かれは、貨幣資本と現実資本とを混同しており、また資本と貨幣との関係について正しい理解をしていないのであるが、こうした混乱のなかを通して、かれが資本とは貨幣資本、貸付資本のことであると考えていることは、はっきり窺うことができる。かれはこう考えているのであるが、また同時に、かれは貸付資本の利害と産業資本の利害とが同じであるといいたい——なぜそういいたいかというと、あからさまにでなく貸付資本の利害を一方的に主張したいからである——。この両者の利害が同じであると説くことは、かれが貨幣資本と現実資本とを混同しているという理論的謬見によってまた裏付けられている。

さて、オーヴァーストーンは第三七二二号 おいて質問に答えている、「事業利潤が利子率の昂騰によって破滅するといった考えはひどい誤りです。第一に利子率の昂騰はめったに長つづきするものでなく、また第二に、もしそれが長つづきし、且つ大きいとすれば、それは実は資本の価値の増大の結果であって、資本の価値の増大というのはいかえれば利潤率が増大することです」と。この「資本の価値」なるものは、もってかれが証言において自他ともに韜晦し去る 便利な言葉として、しばしば用いている言葉であるが、マルクスはこれをつぎのように批評している。

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

「高い利潤率から生じる「資本の価値」の増大を、オーヴァーストーンは、貨幣資本にたいする需要の増加から生じるその増大と混同している。この需要は、利子率とはまったく係わりのない諸原因から増大することもありうる。かれみずから、例証として、一八四七年にはそれが現実資本の減価の結果として増大したということを挙げてゐる。御都合次第で、かれは、資本の価値を現実資本に関連させたり、貨幣資本に関連させたりするのである」 Ⅲ四六四頁。きわめて明快である。

右のようにオーヴァーストーンが答えるので、質問者は、割引率が高くなると利子率（マルクス曰く、正しくは企業者利得というべき、と）に大きな影響を与えるのではないだろうかといった質問をして衝いてゆく（第三七二九号）。これにたいするオーヴァーストーンの答辯、——「第一に事業家たちは、かれらの利潤を非常に損うような割引率は支払わないでしょう。かれらはそうするよりもむしろ自分の事業を停止するでしょう」（Ⅲ四六四頁）。この答辯はマルクスがつぎのように批評しているように、誠実に答えているとはいえない、——「然り、もしかれらが破滅することなしにぞうしうるならば。かれらの利潤が高かぎりは、かれらはころよく割引を支払い、利潤率が低落すれば、やむをえずこれを支払う」。ところで、なぜオーヴァーストーンが右のような答辯をしたかという点、つぎに見る。うに、かれは、ひとが手形を割引に附すのは、と、大きな資本を支配したいからであり、もっと大きな資本を支配したがるのは、利益が上るからである、と考えているからである。だから、割引率が利潤を吞みつくすようなさいはひとと手形を割引に出さないはずといわねばならない。かくてかれのこの手形割引論が問題にされねばならないこととなる。

右の答辯に語をついでオーヴァーストーンの自問自答、——「割引とはなんのことであろうか？ なぜひとと手形を割引に附すのであろうか？ といえは、……もっと大きな資本を支配したいからである。ではなぜ、かれはもっと

大きな資本を支配したいと思うのであろうか？ その資本を充用したいからである。ではなぜ、かれはその資本を充用したいと思うのであろうか？ そうすると儲かるからである。割引率がかれの利潤を呑み込んでしまうならば、そうすることはかれにとって儲けにならぬでしょう。」

ここです、オーヴァーストーンが「もっと大きな資本を支配したい」と云っているこの「もっと大きな資本」とはいかなる意味での資本であるか、と問われねばならないであらう。かれは、事業家がこれの入手を求めるのはそうすると「儲かる」からであると云う。したがって、それは現実には産業資本乃至商業資本として利潤をもたらしべく使用されるという意味での資本と解されねばならない。こうした資本が手形を割引に附することによって割引依頼人の手にあらたにその額だけ追加されることになる、とかれは云っているわけである。

そこで批判は二通りになさねばならない。第一に、手形の割引によっては、事業家はすでにかれの手に存する資本額にたいしてあらたに資本額が追加されることにはけっしてならない、ということである。そして第二には、手形の割引によって事業家が入手した貨幣は、かならずしも利潤をもたらしべく使用されるとはかぎらない、ということである。批判がかく二通りになされねばならぬことは、以下銘記しておかれなければならぬ。

さてマルクスは右のオーヴァーストーンの自問自答のなかにつぎのような評言を挿入している、——「さて！ かれはかれの固定した資本の貨幣還流を先取りして自分の事業の停止をまぬかれようと思うからである。期限の来た支払を支払わねばならぬからである。より大きな資本をひとが求めるのは、事業が好調な場合か、さもなければ、事業は不調であっても他人の資本で投機を行う場合だけである。割引は、けっして、たんに事業拡張のための手段ではな

5。1

このマルクスの評言は、第一に、割引率が高くても割引に附するのはこれによって手形の形態で横わっている資本を期日前に現金化することによって事業の停止を免れようと思うからだ、つまり、オーヴァーストーンの云うようにこううさゝい割引を求めないで事業を停止するようなことはなく、また割引を求めるのであるがオーヴァーストーンの云うようにすでにかれの手に存する資本額にたいしてあらたに追加される資本額を入手するのではない、ということ云々である。マルクスは、第三七二九号の右の答辯を受けての第三七三〇号の質問——「商人たちは、いちど事業に足を入れれば、利子率がしばらく昂騰しても、ある期間の間かれらの操作を営まねばならぬのではないでしようか (must they not for a certain period carry on their operation) ？」——にたいして「急所」をおさえたものと評している。

つぎに云っていることは、オーヴァーストーンは、ひとが手形を割引に附するのはこれによってもっと大きな資本を入手しそれを充用すると儲かるからであると言っているが、このように割引率が高いさゝひとが割引に附するのは、むしろ多くの場合——パニックとなればもっぱらそうであるが——予定した還流がないため割引によって貨幣を入手し、それをもつて期限が来た支払を支払わねばならないからである(註)、ということである。ここでは、手形の割引によつてはすでにかれの手に存する資本額にたいしてあらたに資本額が追加されるものではない、といった点ではなく、割引によつて入手した貨幣がいかに使用されるかという点、オーヴァーストーンがもっと大きな資本と云っている点を衝きつゝあるのである。

(註) パニックの下で事業家たちが手に入れようとするものは、——「かれらの目的は……かれら自身宛の満期手形にたいする支払手段を入手することである」(第三七四三号での答弁にたいするマルクスの評言、後出)。



したがってついで、「より大きな資本をひとが求めるのは」かくかくの場合であるとしているこの資本の意味は、手形の割引によつては資本額の追加とはならない、という意味での資本ではなく、その貨幣が剰余価値を生産する乃至その生産を促進するときその貨幣は資本として機能している、という意味での資本であつて、そういう目的に使用すべく、いかえれば現実に産業資本乃至商業資本として機能させるべくひとが貨幣を求めているのを、資本を求めていると云つてゐるのである。そういう資本をより多く求めるのは、つまり事業を拡張するのは、事業が好調な場合があるいは不調であつても他人の資本で投機を行う場合だけである（註）、と云つてゐるのである。いい添えておくと、貨幣をそういう目的に使用するためではなく、つまりかかる資本として使用するためではなく、債務のたんなる支払のために使用すべく求めているとき、かれが求めているのは資本ではなく、貨幣である、ということになるのである。

（註）「ところが、利潤率が高くて、高い利子率を控除すれば低い企業者利得率しか残らない、ということがありうる。企業者利得の率は、高い利潤率がつづいていても、収縮するかもしれない。そうしたことがありうるのは、けだし、ひとたび着手された企業は続行されねばならぬからである。この段階では、たんなる信用資本（他人の資本）をもつて、事業が行われることが甚だしい。そして高い利潤率なるものは、場合によつては投機的、見込的なものでありうる。……高い利子率が、利潤からではなくて借りた他人の資本そのものから支払われる——そして投機の時期には部分的にそうであるが——ということがありうるのであり、そしてこれがしばらく続くことがありうる」（Ⅲ五五七—八頁、傍点—三宅）。「他人の信用資本をあてにする投機師たち」（Ⅲ五三九頁）。マルクスが投機といつてゐるのはかなり広い意味での投機である。なおⅢ五六〇頁で投機的な在荷形成のために生じうる貸付資本にたいする需要の増大について、「われわれはここでは、商品資本の需要供給によつて影響されるような、貸付資本にたいする需要だけを考察する」とし、考察の限定を明かにしている。

さきに記したようにオーヴァーストーンの答辯にたいしては批判は二通りに行われなければならないのであり、マ  
いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

ルクスのこの短評も右のようにこの二つの視角からなされているのである。しかし、それが覺書的に書かれているために読み誤られるおそれが大きいのであって——しかもこれを読み誤ると問題の解決はまったく混乱したものとなる——、マルクスがなにを考へつつこの評言を記したかは、きわめて細心の注意を必要とするのである。

なぜ右のように読み取らないと混乱に陥るかという、たとえば、割引によって入手した貨幣をもって「期限の来た支払を支払う」ということと、それをもって「事業の停止をまぬかれる」、つまり事業を続行するためにそれを使用することとは、かならずしも同じことではない。手形を割引に附すのは自分の資本の貨幣形態を先取りすることになりがいが、一般にその手形の形態で固定している資本を割引によって流動状態におきそれを支払手段または購買手段として使用するといった場合と、予定した還流がないためにその代り金をもって押迫った支払に当てるといった限定された場合とは、区別されぬばならないのである。また「大きな資本をひとが求める」のはと書いている資本を従来かれの手にある資本額に追加される額と解するならば、かかる追加資本額を求めるさい、それをもって事業を拡張するのではなく、期限の来た手形の支払に当てるために求めるといった場合もありうるからである。なお、マルクスはこの評言でおわりに、「割引はけっしてたんに事業拡張のための手段ではない」と書いているが、これは、書き合ひ手形——空手形——を割引に附してそれをもって事業を拡張することができるとしても、そんなことは別だといった意味で書いたのである、と推測される。

なお参考のため、この第三七二九号の質問と答辯の原文を——マルクスが引用を省している箇所も入れて——左に掲げておこう。（“The Evidence, given by Lord Overstone, before the Select Committee of the House of Commons of 1857, on Bank Acts,” London, Longman, Brown, & Co., 1858. 246頁）。

3729. Supposing the average rate of profit to be, say, from 7 to 10 per cent., a variation of from 2 to 7 or 8 per cent. in the rate of discount must materially affect the rate of profit, must it not? — In the first place parties will not pay a rate of discount which seriously interrupts their profit; they will discontinue their business rather than do that. What is the meaning of discount? Why does a person discount a bill? He discounts a bill because he wants to obtain not money, for its own sake; it is useless in itself; he discounts a bill because he wants to obtain the command of a greater quantity of capital: and why does he want to obtain the command of a greater quantity of capital? because he wants to employ that capital; and why does he want to employ that capital? because it is profitable to him to do so; it would not be profitable to him to do so if the rate of discount destroyed his profit.

アンダーラインを附した箇所はマルクスが引用を省いているところであるが、見られるようにオーヴァーストーンは、貨幣自体を入手したいと思うからではないとし、そして、もっと大きな資本を支配したいと思うからであるとしているのである。ところが、ここで問題となっているような割引率が利潤率を呑みつくすほど昂騰する逼迫期にあつては、むしろまさにその逆であつて、ひとが求めているのはまさに貨幣であり、資本ではない。さきのマルクスの短評はこの点を衝いてゐるのであるが、しかし、オーヴァーストーンが貨幣自体を入手したいと思うからではないと云つてゐる場合、貨幣と資本との関係についてマルクスのような區別を持つてゐて貨幣自体を云々と云つてゐるのではない。(註)。

(註) したがって、「商人の目的は貨幣を入手することではありませんか?——いや、貨幣の入手は手形を振出すさいの目的ではありません。貨幣の入手は手形を割引くさいの目的です」(第三七四二号)といっているのにならして、マルクスはつぎのように、オーヴァーストーンはここで割引の目的が貨幣の入手だということを認めるという評言を記しているが、この答弁でオーヴァーストーンは、マルクスのいうような意味で割引の目的が貨幣の入手だと思って云っているわけではない。マルクスもまたそう受取って記しているのではなく、ともかく貨幣の入手が目的だと云っている言葉を捉えてこう書いているにすぎないのである。——「手形の割引が、この信用貨幣を他の信用貨幣、すなわち銀行券に転形することであると同時に、手形(いいうまでもなく約束手形ではない——三宅)の振出とは、商品を用信用貨幣の一形態に転形することである。いづれにしてもオーヴァーストーン氏は、ここで、割引の目的は貨幣を入手することであるということを認める。これまでかればただ、資本を一形態から他の形態に転形するためではなく、追加資本を入手するためにのみ割引させたのである」(三四六七頁)。

オーヴァーストーンは「貨幣は資本を入手するための道具」(第三七三六号)と考えているのであって、したがって、貨幣の入手が目的か、資本の入手が目的かという質問をいくら出しても、うなぎ問答となってしまうのである。たとえば、第三七五八号(三四七二頁)、第三七六〇号(三四七三頁)を見よ。(——「第三七五八号。つまりあなたは、逼迫期における、割引率の昂騰によるこの国の商人たちの困難は、資本を入手することによって貨幣を入手することにあるのではない、と云われているわけですか?——あなたは二つの事柄を混同されるのですが、わたくしはそれをそんな風には一緒にしません。かれらの困難は資本を入手することにあるのであり、かれらの困難はしたがってまた貨幣を入手することでもあるのです。……貨幣を入手する困難と資本を入手する困難とは、同じ困難を過程上相次いでいる二つの段階で見たものです」。マルクスのつぎの評言はまことに痛烈であるといえる。「わたくしは両者を混同するものではありません」(第三八一九号)——「というのには、貨幣と資本とのことであって、かれが両者を区別しないといふかたんなる理由からである」(三四七三頁)。

つまり、貨幣を道具と解するオーヴァーストーンの貨幣観について。——; but it is in getting money not to keep it as money, but merely as the means through which they are to get the capital. これは右の第三七五八号の答弁のとおり『資本論』で引用が省かれてゐる箇所である。かくて第三七五九号——Money is merely a means whereby capital is obtained?——Now we have got to a common locus standi. しかし質問者は当然一向に心底納得しえなかつたことは、第三七六〇号の質問に見られるごとくである。後に見る第三七三六号の答弁のところでは『資本論』で引用を省

かれている文句、——ではなぜかれらは貨幣を入手したいと思うのであろうか？ not to keep it in their pockets [1], but they want to obtain money, because...

ところでオーヴァーストーンの仲間ノーマンもまたこれと同様であるが、かれの証言にたいするマルクスのつぎの評言の皮肉の適切さを鑑賞されたい、——「まず、銀行券や金ばなにかを買うための手段であるという、また、ひとはこれを、そのもの自身のために借り出すのではないという、天才的な発見」(Ⅲ四五七頁)。

### 三

さて、手形の割引において生じることは資本のとっている形態の変化だけであつて、すでにかれの手に存する資本にたいしてあらたに資本が追加されることにはならない。

マルクスはさきに見た第三七二九号について、オーヴァーストーンが手形の割引と追加資本額の貸付とを同一視していることを、つぎのように批判している。——「このひとりよがりの論客は、手形は事業を拡張するためにのみ割引されるもの、事業は利潤が上から拡張されるもの、と想定している。この第一の前提は誤りである。普通の事業家が手形を割引に附すのは、自分の資本の貨幣形態を先取りし、もつて再生産過程を流動状態に維持するためであつて、事業を拡張したりまたは追加資本を調達したりするためではなく、自分が与える信用を、受ける信用によって相殺するためである。また、もしかれが信用によって自分の事業の拡張を欲するならば、手形の割引——これは、すでにかれの手にある貨幣資本を一形態から他の一形態に置換えることにすぎないのである、——はかれにとってほとんど役に立たないであろう。かれはむしろ、長期の固定した貸付を借りるであろう。もちろん、信用やりくり師は、自分の事

業を拡張するために、あるいかさま事業を他のいかさま事業によってカバーするために、利潤をえるためにでなく他人の資本の占有者となるために、自分の空手形を割引させるであろう」(Ⅲ四六五頁、傍点—三宅)。ここでもいわんとしていることは、要するに、手形の割引とは手形の形態にある資本を他の一形態、すなわち、貨幣の、現金の形態に転形することにほかならない、ということであって、きわめて平明である(註)。

(註)、ただつぎの点について一言。見られるように、ここでマルクスは手形の割引を、自分の資本の「貨幣形態の先取」であるとしているとともに、自分の手にある「貨幣資本を一形態から他の形態に置換えること」であるとしている。ここで貨幣資本とは貨幣形態を採っている資本にほかならないが、手形の形態にある資本は貨幣資本であるか、またそれと関連して、手形を割引いて自分の資本の貨幣形態を先取するとはどういうことであるか、ということ念のため記しておく。

まず、資本が手形の形態をとっているさい、その資本は貨幣資本、商品資本のいずれの形態にあると見るべきであるか。この場合手形と引換えに商品を譲渡した資本家にとって——その商品そのものにとつて——ということでは問題になりえないが——、その商品の貨幣への姿態変換はいまだ成就されてはいない。この手形が流通して相殺されるかぎりには、「それは絶對的に貨幣として機能する、というのはい、その場合には、ついに貨幣に転形するということが生じないからである」(Ⅲ四三六頁)が、そうでないかぎりには、期日に貨幣に転形されなければならない。だが、その商品は手形と引換えにという形で販売されたのであって、その商品の等価の支払が約定期日に延ばされているにすぎない、——とはいえ、現実には支払われるか否かは支払われて見なければ分らないことであって、したがって信用関係であるのであるが。資本価値は、まだ貨幣に転形してないという点ではいまだ商品形態を完全に脱却していない、とともに、一つの貨幣請求権に転形され、しかもそれが再び商業貨幣として流通しうるものであるという点では、すなわち手形が「本来の商業貨幣」(Ⅲ四三六頁)であり、広義の信用貨幣である点では、一つの貨幣形態に転形されていることになる。つまりこのさいその資本は貨幣形態にあるとも商品形態にあるとも一義的にはいい切れないのであって、要するに手形の形態を採っているというほかない。したがってマルクスは、割引を「貨幣形態の先取」というとともに、この形態にある資本を「貨幣資本の一形態」、あるいはすぐつぎの本文に見るように「資本の貨幣形態」といい、あるいは「かれの資本は商品形態で実存している」ともいっているのである。第二巻において、

産業資本が貨幣資本、生産資本、商品資本の各形態を採って循環するとして考察されたさいには、信用が捨棄されていたのであって、手形の形態を採っている資本は右の三者のいずれにもそのままで分類しえない形態なのである。

つぎに貨幣形態の先取について。商業手形にたいして銀行券は「本来の信用貨幣」(Ⅲ四三六頁)をなす。これは金にたいする請求権を表わすのであって、その意味では商業手形と同じくやはり貨幣請求権の一形態であるが、銀行券は現金として通用するから手形の割引が求められるのである。——「この種の信用貨幣〔銀行券〕はたんなる商業流通から出て一般の流通に入り、そしてここで貨幣として機能する」(Ⅲ四四〇頁)。「恐慌においては、商品とその価値姿態たる貨幣との間の対立が、絶対的な矛盾にまで高められる。だからこの場合には、貨幣の現象形態は問題にならない。支払が金でなされるはずであろうと、信用貨幣、たとえば銀行券、でなされるはずであろうと、貨幣飢饉は依然として同じことである」(Ⅲ四四四頁)。「恐慌期には手形の流通がぜんぜん利かない。誰も現金払しか受けとろうとしないので、誰も支払約束書を使うことができない。イングランド銀行券のみが——すくなくとも今日までのところイギリスでは——流通能力を維持する」(Ⅲ五八七頁)。手形の割引も極度に困難となる。信用貨幣としては、「信用貨幣そのものは、それが名目価値の額において絶対的に現実の貨幣を代表するかぎりでのみ、貨幣である」(Ⅲ五六二頁)であり、「信用貨幣の貨幣への転換可能性」(同頁)が確保されていなければならない。そしてその点の信用において、同じ銀行券であっても地方銀行券と中央銀行券とは同一でないとともに、後者は多かれ少かれ法定の支払手段となっているのであって、ために国内では、いつでも金と兌換されうる信用貨幣の性質を失っても、現金として通用する。——「国内では今日もう金属貨幣を必要としないということとは、非常時に唯一の救済手段として訴えられるところの、いわゆる国民銀行の現金支払停止によって証明される」(Ⅲ五六二頁)。かかるさい、この銀行券は不換銀行券、不換紙幣として流通するのである。しかし世界貨幣としての貨幣の機能におおては、「つねに、現実の貨幣商品、すなわち生身の金銀が必要とされる」(Ⅲ一五〇頁)。すなわち「現実の貨幣(das wirkliche Geld)」が必要であることは言うまでもない。手形割引——これは、「貨幣請求権を」形態から他の形態に、または現実の貨幣に転換すること」(Ⅲ四六七頁)である。

本文のところでマルクスがいわんとしていることは、手形の割引が自分の資本を貨幣形態に転換することであるということ、つまり既存の資本のとなっている形態の転形であるということであって、そのかぎりにおいてはこの註はただ念のためのものすぎない。

手形の割引において生じることが、資本の持っている形態の変化だけであって、すでにかれの手に存する資本にたいしてあらたに資本が追加されるものではない。この点——もちろん他の諸点では、たとえば手形の割引は普通の商品の売買ではなく信用関係であるといった、差異があるが——、商品を販売して貨幣、現金を取得した場合とまったく同様である。商品を現金で販売することによって、資本家はかれの資本を商品形態から貨幣、現金の形態に転形しえたのであるが、この販売によってあらたになんらの資本も増加したことにはならないであろう。

ところがオーヴァーストーンはそうは考えない。かれの眼には、割引によって割引依頼人はあらたにその手に資本が追加されることになることと映じる。とすれば、オーヴァーストーンの眼には割引依頼人ははじめなんらの資本も持っていないと映じていることになる。そうでなければならぬ。したがってここで、かれは一体「資本」と云うときこの言葉をどういう意味で使っているのかということ、ならびに、かれは一体手形をなんと解しているかということが、問は質されなければならない。

まず第一の点について。マルクスは、オーヴァーストーンが、右のようにひとが銀行業者のところで手形を割引に附すのは「資本を支配したいから」(第三七二九号)であるとし、またひとが「低い利率で資本を支配することができるとすれば」(第三七三〇号)、それはかれにとっては好ましいことである、と云っているのに対して、つぎのように評している。——「オーヴァーストーン氏は「資本」をいま突然にかれの銀行資本とのみ解し、したがって、かれのもとで手形を割引に附す男を資本のない男だ——というのは、かれの資本は商品形態で実存しているからというわけで、または、その男の資本の貨幣形態はオーヴァーストーン氏により他の貨幣形態に換えられる手形だというわけ——と着なす……」(三四六五頁)と。



オーヴァーストーンは資本とは、オーヴァーストーンが自由にしているような資本、つまり銀行資本のことである、銀行資本——この場合いかえれば利子生み資本、貸付資本といっても同じである——だけが資本である、と考える。だから、かれの眼には、割引依頼人は手形の形態で資本を持っているのであるが、「資本のない男だ」と映じ、割引によってあらたに「資本を支配することになると映じる。かくして割引は資本の形態の変化にすぎないのに、割引と追加資本の貸付とが同一視されることになる。マルクスがオーヴァーストーンの答辯を「偏狭な銀行業者的立場」(皿四六四頁)といっているのは、かれがこういった考え方をしているからである(註)。なお、マルクスがここで、オーヴァーストーンが「資本」をいま「突然に」かれの銀行資本とのみ解していると書いているのは、さきにかれの得意の「資本の価値」について見たように、オーヴァーストーンは利潤率の増大と利子率の昂騰とを、現実資本と貨幣資本とを、混同し、同一視して説明してきていたからである。

(註) 上のようなオーヴァーストーンの資本観は、つぎの問答においてさらにくっきりと示されている。——「金準備(イングランド銀行の——マルクス)が減少する場合、大きな困難は、逆に、資本家たちにとって貨幣を入手しえないということではありませんか?——いや、貨幣を入手したいと思うのは、資本家たちではなくて、資本家でない人々です。では、なぜかれらは貨幣を入手したいと思うのであろうか? といえば、……かれらは貨幣を媒介として、資本家でない人々の事業をやってゆぐために資本家の資本にたいする支配を入手するからです」(第三七三六号、傍点—三宅)。マルクスはいう、——「ここにかれは、工場主や商人はなんらの資本家でもないこと、および資本家の資本とはただ貨幣資本だけであることを、卒直に宣言する」(皿四六六頁)。と。質問者のいう「資本家たち」とは産業資本家、商業資本家を指しているものであり、これにたいして答弁者のいう「資本家たち」とは貨幣資本家のことであって、貨幣資本家しか眼中にないことをさらけ出しているわけである。なお附言しておく、この質問者の見解——かかる場合大きな困難は資本家にとって貨幣を入手しえないことであって、資本を入手しえないことではない、といった——もまた正しいものではない。このことについてはのちにまた見る。それは措くと

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

して、質問者は右の答弁をえて直ちにつきのうちに質問している。「為替手形 (bills of exchange) を振出す人々は資本家ではないのですか?」——為替手形を振出す人々は、資本家であるかもしれないし、またそうでないかもしれない」(第三七三七号)。マルクス曰く、——「ここでかれはゆきつまる」と。なおこの為替手形は売り手が買い手宛に振出したものである。

オーヴァーストーンが資本とは貨幣資本のこと、銀行資本のことであると考えているのは、いいかえれば資本というとき利子生み資本のみを眼中においているのであるが、このことはつぎの答弁からはっきり窺うことができる。——「銀行業者は仲介人であつて、一方では預金を受け入れ、他方ではこれらの預金を、資本の形態で、それを委ねることによつて、人々の手に振向けるのです」(第三七六三三号)。マルクスの評言、——「ここでわれわれはついに、かれが資本をなんと解しているかを知る。かれが貨幣を資本に転化するののは、かれがそれを「委ねる」ことによつてであり、より婉曲でなくいえば、かれが利子をとつてそれを貸出すことによつてである」(四四七三頁)。貸付資本家にとつては貨幣は貸付というたんなる行為によつて資本となる。資本制生産の基礎の上では貨幣は貨幣として有する使用価値のほかに利潤を生み出すという使用価値をもつ資本として機能するといふ使用価値を受けとることとなるが、利子生み資本において貨幣はかかる使用価値をもつ商品——利子がこの独自の商品の価格となる——として、はじめから資本として譲渡される、貸付けられることとなる。かかる利子生み資本のみを眼中においており、かかる立場に立つてのみ考える利子生み資本の確化としてのオーヴァーストーンにとつて、貨幣と資本との關係について、両者を正しく區別しえないでいることは、このことからしてもむしろ事理の当然といふことができるであらう。

なお念のため、——このようにオーヴァーストーンが資本とは貨幣資本のことであると考えている、とした貨幣資本の意味は、生産資本、商品資本と並んでの貨幣資本の意味ではなく、独自の範疇としての貨幣資本である。——「資本の他の諸形態から區別されたものとしての貨幣資本」(四四五八頁)、「利子生み資本すなわち貨幣資本」(四四二〇頁)、「産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」(一八六三年一月に書かれた「資本と利潤」についてのプランの⑧)。

つぎに第二の点について。オーヴァーストーンは一体手形をなんと解しているのか。マルクスはつづいてつぎのように記している、——「かれはこんどは、商人たちの手形は、かれらが販売したまたは船積した商品を代表しないかど

うかと質問される。銀行券が金を代表するのとまったく同様に、これらの手形は商品の価値を代表するということを、かれは否認している（第三七四〇、三七四一号）（註）。これはやや厚かましい話だ」（四四六七頁、傍点—三宅）と。オーヴァーストーンは銀行券については銀行券は金を代表するものだといひ、手形——しかもこれは、空手形は別として、商品の引渡しにたいして振出されたのであるから、銀行券が金準備額をこえて発行されうのに對比してかかる余地がない——についてはそれが商品の価値を代表するものであることを否認する。したがってまさに etwas unver-schämmt だとうべきである。ともかくこのようにしてオーヴァーストーンは、ひとが割引に附す手形はかれの資本が商品形態から手形形態に転形したものにはかならないこと、したがって割引依頼人は資本を手形の形態で持っているのであること、これらのことを理解しようとしないのである。

（註） オーヴァーストーンはここで、振出された手形が商品と関係があることは認めるが、しかしその関係は銀行券が金を代表する関係とは同じではない、と云って、この同じでない点を強調して否認しているのである。そのかぎりでは、いい拔けえいるといえよう。

なおここで、割引が追加資本の貸付と異なること、割引によってはすでにかれの手に存する資本にたいしてあらたに資本が追加されることにはならないことについて、一言つけ加えておこう。総じて事業家Xは受取手形を必要のさい現実的還流に先立って現金化することによって、予備資本の必要を免れうる。——「かようにして「この」は意味深く使われているのであるがいまここではかんたんに手形の割引によってと解しておいて差支えない」個々の各製造業者や商人は、強大な予備資本の必要ならびに現実的還流への依存を免れる」（四四二八—九頁）。割引によるこの効果だけを取り出して見ると、これによって従来予備資本として持っていなければならなかったものが自由になると見られうるので

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

あるが——したがってたとえば生産の拡張にこれを振向けることができる——、しかし事業家Xは商品を現金ではなく手形で売ることによって、他の事情を同一とすれば、還流すべき貨幣資本が手形期間の間還流が延びることとなるのであって——「事實上、商業信用の基礎上では、一方の人が他方の人に、自分が再生産過程で必要とする貨幣を貸すのである」(Ⅲ五五〇頁)——、この手形を割引に附することによって貨幣を入手することは、必要のさいに「自分が与える信用を受ける信用によって相殺する」(前出)ことになるのであることが、看過されてはならない。したがって、右の問題を考察するさい、割引による効果だけを取り出して、この免れた予備資本をもって事業を拡張することができるとすることは片手落になるのである。

#### 四

第三七四三号においてオーヴァーストーンはまたつぎのように質問される、——「一八二五年、一八三七年および一八三九年に生じたとおっしゃるような逼迫またはパニックの下では、事業家たちの大きな願はなんだろうか。かれらが手に入れようと目ざすのは資本ですか、それとも法貨ですか?——かれらが目ざすのは、自分の事業を維持するために資本を支配することです。」(3743. What is the great desire of the mercantile community, under a pressure or panic such as you state to have occurred in 1825, 1837, and 1839; is their object to get possession of capital or the legal tender? — Their object is to get the command of capital to support their business.)

これにたいするマルクスの評言——「かれらの目的は、おそいきたった信用欠乏のゆえに、また自分の商品を価格

以下で売りとはさなくともすむために、かれら自身宛の満期手形にたいする支払手段を入手することである。かれら自身が総じてなんらの資本も持っていないとすれば、かれらは支払手段と同時にもちろん資本をも入手する。ただし、かれらは等価物なしに価値を入手するからである。貨幣それ自体にたいする要求 (Verlangen nach Geld als solchem) は、つねに、価値を商品または債務請求権の形態から貨幣の形態に置換えようとする願望にほかならぬ。だから、恐慌を度外視しても、資本借用と割引——これは、貨幣請求権を一形態から他の形態に、または現実の貨幣に、転形することにすぎない——との間には大きな区別があるのである」(Ⅲ四六七頁)。

ここでマルクスがいつていることは、まず第一には、恐慌期に、事業家たちが目ざすのは支払手段の入手であるという事。第二には、これを入手するに当って「かれら自身が総じてなんらの資本も持っていないとすれば」、すなわち割引に附しうる手形とか、売れる有価証券とか、または担保として通用しうる有価証券、商品とかを持っていないとすれば、かれらは右の支払手段を入手すると同時に、従来かれの手に存する資本にたいしてあらたに追加される資本をも入手することになるという事。第三には、かかる追加資本の入手ではなく貨幣それ自体の入手を求めているのは、かれの持っている資本が商品形態または手形のような形態にあるためこれを貨幣形態に置換えようとしているのであるという事。第四には、いま問題としているのは恐慌期であるが、第二、第三のような次第であるから、一般的にいつて、資本の入手と貨幣形態の入手との間には、つまり資本借用と割引との間には大きな区別があるという事。以上のことである。

オーヴァーストーンが、恐慌期に求められるものはなにかという質問にたいして、資本にたいする支配を入手することですといっているのは、求められるものは支払手段の入手であることを解していないものであるとともに、追加資

本の入手になる場合と割引のさいのように貨幣形態の入手にほかならぬ場合とを區別していないものである。これは繰返し述べたように、かれがもっぱら貸付資本のみを眼中においているためであつて、貸付資本の見地においては、支払手段にたいする需要であらうとあるいは産業資本にたいする需要であらうと等しく貸付資本にたいする需要ということになるのであり、また割引の場合であつても、貸付資本にたいする需要にほかならないからである。割引依頼人は手形を売って貨幣を取得するのであり、貨幣の貸付を受けるのではないが、貸付資本家としては貨幣を利子生み資本として投じるのである。オーヴァーストーンは貨幣資本と現実資本とを、また貨幣と資本とを、混同しつつ、混乱しているのであるが、この混乱の大部分は、かれが右のように肝腎のときは貸付資本の見地にもっぱら立っていないが、しかもかれ自身そのときそういう見地にのみ立っていることを明確に意識していないために生じているのである。

ところで注意すべきことは、恐慌期に事業家たちが目ざすのは資本であるか、法定支払手段であるか？ といった質問者の質問自身も、質問として妥当であるかというところ、けつしてそうではないことである。この質問にたいして支払手段であると答えただけでは十分ではないのであり、もし事業家自身が等価物を持っていないならば、求められるものは資本の、追加資本の入手でもあるのである。また求められるのは資本であるともいふならば、それは資本として生産過程にまた流通過程に投ぜられるかというところではないし、また手形が割引に附されるような場合にはこれによって追加資本の入手が求められるのではない。つまり、右の資本か貨幣かという質問にたいして、どちらか一方という場合には答えることができないのである。まず質問者が右のうちどういう意味で資本か貨幣かと質問しているかを確かめなければ、どちらとも答えることができない。そして質問者自身、右のように質問していることか

から見られるように、資本と貨幣との関係について正しい理解を持っているものではないのであって、したがってまたこの問題は、質問者はオーヴァーストーンの混乱を相当に衝いてはいるが、しかし当時においては解決を与えられなかつたわけなのである。

以上、第三七二九号、第三七四二号を中心として、第二十六章におけるオーヴァーストーンについてのマルクスの抜き書きと評言とのいくつかを、本文および註で見て来た。ここにエンゲルスは、「私——編纂者——はここにあって一つの注意を差挿んでおく」として書き入れをしているが、このエンゲルスの書入れについては、前記のように、第二十八章での書入れと併せてのちに見ることとし、つぎに、さきの評言に内容的に直接関連しているマルクスの他の箇所での説明を二、三見ることしよう。

## 五

マルクスは第三十二章のところで、一部前記のように、つぎのように述べている、——「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支払手段にたいする需要であって、それ以上の何ものでもない、——購買手段としての貨幣にたいする需要ではけつてない。この場合、利子率は非常に昂騰しうるのであって、そのことは現実資本——生産資本および商品資本——が過剰に存在するか欠乏しているかにかかりはない。支払手段にたいする需要は、商人や生産者たちが確かな担保物 (gute Sicherheit) を提供しうるかぎりには、貨幣への転態可能性にたいするたんなる需要である。そうでないかぎり、つまり、支払手段の前貸がかれらに貨幣形態を与えるばかりでなく、かれらに不足している支払のための——形態のいかんを問はず——等価物を与えるかぎりには、支払手段にたいする需要は貨幣資本にたいす

る需要である」(三五六〇—一頁)。そしてつづけていう、——「これこそは、通説の両面が恐慌の判断にさいして正鵠をえ且つ間違えてゐる点である。この場合、支払手段が欠乏しているにすぎぬと云う人々は、眞の担保物 (bona fide Sicherheiten) (註一) の所有者だけを眼中に置いてゐるのであるか、さもなければ、紙片によってあらゆる破産した思考師たちを支払能力のある堅実な資本家に転化せしめることは銀行の義務であり且つないうるところだと信じてゐる愚物か (註二) である。またこの場合、資本が欠乏しているにすぎぬと云う人は、ただ字義に拘泥するだけであるか (註三) —— けだし、かかる時期には過剰輸入および過剰生産の結果として貨幣に換へない資本が大量に存在するのだから——、さもなければ、かれらが問題としてゐるのはただかの信用やりくり師、すなわち、いまや事実上もはや遣繰りするための他人の資本が入手できない状態にあつて、銀行にたいし、ただに失つた資本の支払を助けてくれるばかりでなくさらに恐慌を継続できるようにしてくれと要求するところの、かの信用やりくり師だけであるか、である」(三五六一頁 傍点いずれも原文のまま)。

マルクスがオーヴァーストーンの証言にたいする批評のところ、恐慌期に事業家たちが目ざすのは支払手段の入手であること、これを入手するに當つて「かれら自身が総じてなんらの資本ももっていないとすれば」かれらは右の支払手段と同時に資本——追加される資本——をも入手するというところ、かかる追加資本の入手ではなく貨幣それ自体の入手を求めているのは「価値を商品または債務請求権の形態から貨幣の形態に置換えようとする」ものであること、を指摘してゐたことはさきに見たところである。いま右に引用した文の前半で、貨幣形態を与えるだけの場合、そうではなくて資本をも入手することになる場合の區別について述べてゐることは、これと同じ説明である。たださきには、「価値を商品または債務請求権の形態から貨幣の形態に置換えようとする」として、手形の割引ばかりでな



く商品や有価証券担保の貸付も含めて述べているとはいえ、とくに「だから、恐慌を度外視しても、資本借用と割引との間には大きな区別がある」として、資本借用、つまり追加資本の借入れと手形の割引とを対比させていたのであったが、いまここでは、「確かな担保物を提供しうるかぎり」と「そうでないかぎり」、すなわち担保付貸付と無担保貸付とを対比させている点がややことなる。

(註一) インスティテュート版では die Besitzer von bona fide Sicherheiten にとりて [von Papieren über empfangene Waren] という書込みの註を入れているが、bill を形容していわゆる真正手形をいっている場合であればともかく、担保物についていっているこの場合では、狭く限定しすぎているように思われる。

ここで附言しておく、上來云っているところの、またここで云っているところの、担保付貸付の担保は、いうまでもなく眞に担保として通用しうる担保であつて、担保として妥当な評價がなされそれについて貸付が与えられるのである。したがつて、たとえば恐慌期には、商品の龐大な滞荷を持つていてもそれは眞の担保として通用しうるはずのものでないことは、いうまでもない。したがつてまた、今日のいわゆる滞荷金融のような場合について論じるさい——このような現状分析をなすさいにはその他の多くの諸事情をも十分に併せ考慮しなければならないが——、それが形式として担保付貸付の形式を採つていても、それをもつて直ちに実質的にも担保付であると看做しうるかどうかは別問題である。

なお、一八五七年の恐慌のさいエンゲルスはマルクス宛の手紙のなかでつぎのように書いている。——「商品の所有者たちは商品を担保とする前貸を受けることによつてのみ、強制販売から救われうる。こんな状態の下では、これは困難であらう、そしてとにかくかかる前貸の額は商品価格の暴落(砂糖では三五パーセント!)につれて、減じた。そしてたゞ若干の強制販売がやむなくなされるだけで、ただちに、商品はなお下落するだらうことは確かだ。だから所有者たちは以前にはより高い価値の三分の二または四分の三を前貸されて受取つたのに、いまは、減じた価値のせいぜい二分の一しか手に入れていない。つまり、前に入手した借入金の約半額である。このことは事態を間もなく爆発に導くにちがいない。だが、マインシング・レイン [「ロンドン」の街名、ここにはコーヒ、茶の取引所がある] およびマート・レイン [同上、ここには穀物の取引所がある] の商売がなおしばらくの間緩慢な下落を保つていて、それからはじめて若干の大きな破産がそこにやってくる、といったこと

いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について

もまたありうる。この破産が、またリヴァプールやその他の港における破産が、やってくるのはたしかだ。砂糖、コーヒー、棉花、羊毛、皮革、染料、絹、等々における損失は莫大なものである。……これらの商品にたいして振出された手形が満期になるにつれて、破産もまたやってくるにちがいない」(一八五七年十二月七日附)。

(註二) マルクスはまた別の箇所でいっている、——恐慌は、「たとえばイングランド銀行のごとき一銀行が、その紙券をもつてすべての思惑師に不足の資本を提供し、また減価した商品全部をそのものと名目価値で買うことによって、治療されえなう」(Ⅲ五三五頁)。

(註三) 「恐慌中に明るみにでる産業資本の過多にかんしてはつぎのことを注意しなければならない。商品資本は、即目的には同時に貨幣資本、すなわち、商品の価格で表現された一定の価値額、である。使用価値としては、商品資本は、一定量の一定の使用対象であつて、これは恐慌期には過剰に現存している。だが、……恐慌の前夜および恐慌中には、商品資本は、潜勢的貨幣資本としてのその屬性においては収縮している。……もしこのことが、一國の貨幣資本は逼迫期には減少しているという主張の意味だといふのであれば、これは、諸商品の価格が下落しているということと同一である」(Ⅲ五三五頁)。

したがってここでこの担保付貸付について若干の考察を加えておこう。右の文章では逼迫期を問題としているのであるが、「資本借用と割引との間」の「大きな区別」と同様に、「恐慌を度外視しても」、担保付貸付と無担保貸付との間には大きな区別がある、とマルクスが考へていることは右の文章からも明らかである。マルクスはいう、「商人や生産者たちが確かな担保物を提供しうるかぎりには、貨幣への転態可能性にたいするたんなる需要である。」

いま、流通期間が延長した場合には事業家Xは従来と同じ規模で生産を続行するためには追加資本を必要とするが(註)、そのさい商品担保で貨幣の貸付を受けるとすると、それは従来かれの手に存する資本にたいしてあらたに追加される資本を入手したことになるのではなからうか、といったことについて考へて見よう。

(註) 参考のために、——「流通時間したがって回転期間が延長されるならば、追加的資本の投下が必要である。資本家が追加

的資本を所有している場合には、かれ自身のポケットから。だがその場合には、この資本はなんらかの形態で、金融市場の一部分として投下されているであらう。それを自由に処分されうるものたらしめるには、それは在来（ザラ）の形態から解放されねばならぬ、すなわちたとえば、株式は売却され、預金は引出されねばならぬのであり、かくしてこの場合にも金融市場への間接の影響が生じる。あるいは、かれはそれを借用しなければならぬ。追加的資本のうち労賃のために必要な部分についていえば、正常な諸事情の下ではそれはつねに貨幣資本として投下されねばならぬのであって、そのために資本家Xはそれ相当の直接的庄迫（ザラ）を金融市場に加える。生産諸材料に投下されるべき部分については、かれがそれらを現金で支払わねばならぬ場合にのみ、貨幣資本が必要である。かれがそれらを信用で入手することができるならば、追加的資本は金融市場になんら直接の影響はない。けだし、この場合には、追加的資本は直接に生産在荷として投下されるのであって、まず貨幣資本として投下されるのではないからである。掛売主がXから受取った手形などをふたたび直接に金融市場に投じてこれを割引せたりするかぎりは、追加的資本は間接に、すなわち第二の手を通じて金融市場に影響するであらう。しかるに、もしかれが、たとえば後日支払わすべき債務の弁済のためにこの手形を利用するならば、この追加的投下資本は直接にも間接にも金融市場に影響しない」（第二部第二篇第十五章「資本投下の大きさに及ぼす回転期間の影響」、II二九〇—一頁）。

一見するとこの場合かれはこの商品担保貸付によって、必要とする追加的貨幣資本を入手したごとく見えるのであるが、注意すべきことは、かれはこの流通期間が延長した商品を担保として取ってもらいえ、そして貨幣を入手しえたことによって、流通期間の延長による追加的な貨幣資本の必要自体を当面解消しえたことになることである。この点たとえば手形の支払期限が長期化しこのため流通期間が長くなったさいに、やはり事業家は従来と同じ規模で生産を続行するためには追加資本を必要とするが、もしこの手形の割引によって貨幣を入手しうるならば、かれにとっては手形の期限の長期化が割引によって解消しえたことになり、したがってまた追加的な貨幣資本の必要自体を解消しえたことになるのと同様である。異なるところは、後者の場合は期限に手形が支払われるかぎりこの事業家は流通

期間の延長からまったく免れえたことになるのにたいし、前者の場合にはいずれ自身で商品を売却して返済しなければならぬことであるが、これは後者が手形の割引であり、前者が貸付であるということから来る相異点であるにすぎない。

貸付によって商品資本の形態を貨幣資本の形態に置換えることができたのであって、貨幣形態を入手しえたのでありあらたに追加される資本を入手したのでないことは明かなのであるが、一方それによって従来稼動していた資本にたいする追加資本を入手しえたかのごとく見誤られると、混乱をひき起すこととなるので注意を要する。このように見誤られ易いのは、担保の商品が従来稼動していた資本の一部であるためであって、この担保が株式とか公債などの有価証券である場合には、事業家Xは必要とされる追加資本をあらかじめ所有していたのであり、それが有価証券の形態をとっていたのを貨幣形態に置換えたにすぎないのであって、事態は明瞭である。

いま一つここで注意さるべきことは、従来の投下資本の一部である機械、設備、工場財団などを担保として貸付をえた場合、それはあらたに追加される資本を入手したことにならないであろうか、ということである。右の商品、有価証券担保のさいには貨幣形態の取得にすぎなくあらたに追加される資本を入手したことにはならず、したがって従来持っている資本以上の資本を手中に収めて事業を拡張するといったことは、これによっては計ることがほとんどできないうのにたいして、機械、設備を稼動させつつこれを担保として貸付を得ることは、まさに、右の制限を打破して新資本を入手する途をこれによって講じたものといふことができる(註)。この場合は担保付貸付であっても、そして担保として提供するよりも少額の資本価値しか入手しないといえ、借手はあらたに追加される資本を入手したことになる。もっとも、不動産担保の貸付——この場合にもそれが稼動している資本、土地の一部であるさいにはあらたに

追加される資本を入手することになる——などととも、これは普通の一般的な銀行の貸付業務には本来属さない。

(註) この機械・設備、工場財団などを担保とする貸付は資本制生産の比較的のちにいたって行われるにいたったものである。

なお、と同時に、「担保付前貸の形態は、商品を担保とする前貸または手形、株式、等々のような債務証券を担保とする前貸を除けば、より古風な形態である」(Ⅲ三七三頁) こともまた注意されるべきである。

さてつぎにさきに引用した文章の後半の方を見よう。恐慌期に貸付資本が求められるのは債務の支払のための支払手段としてこれを使用するのが目的であって、剰余価値を生産するために乃至その生産を促進するために使用することを目的とするのではない。この場合、確かな担保を提供しうるならば貨幣形態を入手するにすぎないし、そうでないならば同時に貨幣資本をも入手することになる。前のところを繰返すところである。したがって、恐慌期に不足しているのはなにか、という問にたいして、支払手段であるとも資本であるとも一言で一面的には答えることができないわけである。この問題にたいする従来の問題提起の仕方としてマルクスが掲げていたものを想起されたい。——「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支払手段にたいするたんなる前貸と看なされるべきであるか?」(Ⅳ四九七頁)、「いったい、かかる逼迫期に欠けているのはなんであるか? 資本であるか、それとも、支払手段としての規定性をもつ貨幣であるか? これは周知のように一つの論争問題である」(Ⅲ五〇二頁)。

資本として機能せしめるためではなく、債務弁済のために支払手段として使用するためであると答え、且つ、こうこの場合には貨幣形態を、つまり貨幣を入手するにすぎないが、こうこの場合には貨幣資本を入手することになると答えなければならないのにたいして、そういった答え方をせずに一言で一面的に答えるならば、当然に「正鵠をえ

且つ間違えている」答とならざるをえない。マルクスはここで一言で答えることが当然でないものであることを指摘しているのである。とともに右のような従来の問題提起そのものが——一言でどちらかと答えることができるかのように予想して立てている——不完全であることをも働いていることとなる。なおこの後半については若干の句にうつてさきに附しておいた註を見られたい。

## 六

つぎに『剰余価値学説史』のなかのつぎの叙述を見よう。「……たとえば、貨幣がある「浪費者」に、すなわち消費のために貸付けられるときには、利子はたんなる移転でありうるのであって、なんら現実の剰余価値を表現することを要しない。しかし同様な場合は、支払をするために貨幣が借入れられるときにも起りうる。両場合とも、それは貨幣として貸付けられるのであって、資本としてではないが、しかし貨幣の所有者にとっては、貸付というたんなる行為によってそれは資本となる。第二の場合、割引またはすぐには売れない商品への担保貸付 (Diskontierung oder Beleihung von augenblicklich nicht verkäuflichen Waren) のちを以て、貨幣は資本の流通過程に、すなわち商品資本の必然的転形に、貨幣資本として関係しうる。かかる転形過程の促進——信用においてその一般的本質上なされるような——が、再生産したがって剰余価値生産を促進するかぎりでは、その借入れられた貨幣は資本である。これに反し、貨幣が、再生産過程を促進することなく、債務の支払に役立つだけであって、おそらくは再生産過程を不可能ならしめるかまたは縮少せしめるかぎりでは、それは借手にとってはたんなる支払手段であり、「たんなる」貨幣であり、そして貸手にとっては事実上、資本の過程から独立している資本である。この場合においては、利

子は、「収奪に基ずく」(“upon expropriation”)利潤のように、資本制生産——剰余価値の産出——そのものから独立している一つの事実である。貨幣のこれらの特殊な形態——消尽するための商品にたいする購買手段としての、および債務にたいする支払手段としての——こそ、利子のこの形態が、「収奪に基ずく」利潤とまったく同じように、資本制生産において再生産されるがしかしそれとは独立してより以前の生産様式に属しているところの形態を表わすということを生ぜしめるのである。しかし、貨幣(または商品)が生産過程の外部で資本たることをえ、資本として販売されることをうろことは、資本制生産の本性から出てくることであるが、このことはまた、貨幣が資本に転形されずただ貨幣として役立つにすぎないところのより古い諸形態においても起りうるのである。利子生み資本のより古い第三の形態は、資本制生産が、まだ存在せず、利潤がまだ利子の形態で着服され、資本家がたんなる高利貸として現われる、ということに基ずくものである」(ディーツ版、第三卷、五五九—五六〇頁、邦訳、全集版、五五—二頁)。

見られるように、ここでは、「消費のために貸付けられる」場合——この場合には貨幣は商品を生産、事業に用いるためではなく消費してしまうために購買する購買手段として求められ、使用される——と、「支払をするために借入れられる」場合——つまり「債務の支払に役立つだけ」である場合であって、この場合には貨幣は「たんなる支払手段」として「債務にたいする支払手段」として求められ、使用される——とを挙げ、この両場合において、貨幣は貨幣として貸付けられるのであって資本として貸付けられるのではないということ、しかし貸手にとっては資本となるということが指摘されている。そして右のいずれの場合においてもその貨幣を使用することによって剰余価値が生み出されるものではないから、利子は剰余価値の一部ではない、つまりこの場合利子は資本制生産過程から実際に

独立している、したがって、貸手にとって貨幣が資本であるということも資本制生産過程から実際に、独立して資本となっているのである、ということが指摘されているのである。

ここで少々この文章の連関、この文章の置かれてゐる位置についての解説を挿入しておこう。このように右の両場合、利子は資本制生産過程から実際に、独立している。ところで、資本制生産の基礎上では貨幣は資本として機能しうるということから、貨幣は資本として機能するという使用価値をうけとるが、利子生み資本においてはこの貨幣がそのまま資本として売買される、——それは貸手にたいして利子をもたらしという意味で貸手にとって資本であるばかりでなく、利潤を生み出す使用価値をもつものとして、これを使用する他人にとつても資本として機能するものとして、譲渡される。そして利子はこの商品の価格として現われる。かくして、貨幣が、それを資本たらしめるべく媒介する生産過程、流通過程から引き離されて、それ自身が資本として現われる、つまり資本がたんなる物として現われ、そして利子にかかる物である資本の果実として現われる。資本制社会において、利子および利子生み資本という範疇の成立によって資本物神がこのように完成されるにいたる。こういったことをマルクスは利子生み資本論において指摘しているのである。そして『資本論』の第三卷第二十四章「利子生み資本の形態における資本関係の外面化」はこのことについてのしめくりを与えているものであるが、『學說史』の第三卷第七篇第五章「剰余価値の外面化」においてもまた同様である。しかして右に引用した文章はこの「剰余価値の外面化」の章の末尾に書かれてゐるのであって、さきに引用するさい省略した冒頭のところは、「ここではつぎのことは度外視されてゐる」と書かれてゐる。つまり、利子生み資本において資本が過程から引き離されて物として現われるということを「ここでは」指摘してゐるのであって、「ここでは」つぎのような、貨幣が資本たることをうることが実際に、過程から独立してゐる場合は



「度外視」しているのである、といっているのである。つぎのような場合には実際に過程から独立しているのだが、いま「ここでは」資本制生産の本性から独立化が生じるということを指摘しているのだ、と断っているのである。そして実際に独立している場合として右のような二つの場合があり、これは資本制生産の下において再生産されるが、より以前の生産様式の下にも存在していた——実際に過程から独立していることから当然であるが——、独立化は資本制生産の本性から生じることであるが以前においても独立化は生じえた——このときは実際の独立化としてであるが——、と述べ、ついで、以前において存した利子生み資本の形態としていま一つつぎのような第三の形態がある云々と述べているのである。

文章の連関、位置についての解説はこの程度にとどめ、ここで注意すべきことは、いま一つ、割引または商品担保の貸付によって入手された貨幣が「再生産したがって剰余価値生産を促進するかぎりでは」、その貨幣は資本であるが、——つまり、割引のさいにそれによって再生産過程における商品資本の貨幣資本への転形が速められたり、商品担保貸付のさいにそれによって当面商品資本が貨幣資本に転形したと同様な効果もたらされ、転形の遅延に伴う追加的貨幣資本の必要から免れしめられたりするかぎりでは、その入手した貨幣は資本として機能するが——、このように再生産を促進することなく「債務の支払に役立つだけ」であるときは、その貨幣は「たんなる支払手段」として機能するのみである、ということが指摘されていることである。後者の場合について、「おそらくは再生産過程を不可能ならしめるかまたは縮少せしめる」といっているのは、たとえばつぎのようなことである（註）。事業家Xがまだ期日の来ない受取手形を持っているが、これは期日に支払われたさいその貨幣をもって期日の来た支払手形を支払い、労賃等を支払うことになっているものであるとき、期日の来た別の受取手形が不渡りとなったためその入金をも

って支払う予定としていた債務の支払に窮し、さきの手形を割引に附して貨幣を入手し、この貨幣をもって債務の支払いに当てたような場合、この割引によって当面の困難は切り抜けられうるとはいへ、この受取手形が期日になったさいにその入金をもって支払う予定としていた諸支払をなすことができない。かくして、「おそらくは再生産過程を不可能ならしめるかまたは縮少せしめる」ことになる。この期日のきた受取手形が不渡りとなったためその入金をもって支払う予定としていた債務の支払に窮したさい、商品を買入れとして借入れ、この貨幣をもってこの債務の支払いに当てた場合についても同様である。かかる場合、現在持っている資本——手形の形態なり商品の形態なりをとっている——を貨幣形態にかえうるならば、これによって当面の切り抜けはできうとしても、続いている時期に晚かれ早かれ循環に支障を来すことになるから、悪くすると「再生産過程を不可能ならしめる」し、工合よく行ってもそれを「縮少せしめる」ことになるのである。右の不渡りとなった受取手形額だけ、還流すべき貨幣資本が還流しないのであるから、循環している資本総額はすくなくともそれだけ縮少することとなり、再生産過程はすくなくとも従来よりも縮少した規模となることを余儀なくされる。

(註) 例は受取手形が不渡りとなった場合でも商品が売れない場合でもよいが、かかる場合とたんなる変動的な流通期間の延長、転形の遅延の場合とは区別して考えなければならぬ。

ちなみにこの場合、追加的な貨幣資本を別に持っているならば、または無担保の借入れによって貨幣を入手しうるならば、従来と同じ規模での生産を続行することができる。しかしその無担保で借入れた貨幣はやはりたんに債務の支払に当てられるのであって、「それは貨幣として貸付けられるのであって、資本としてではない」。この借入れの利子はなんら現実の剰余価値を表現しない。

この『剰余価値学説史』における記述は、さきに見てきた『資本論』中の記述にたいして内容的にあらたにつけ加わっているものはないのであるが、しかし記述がかなり明確な形でなされているという点で、とくに注意すべきものである。もはやここで、エンゲルスの与えている説明の検討に入ってもよいのであるが、その前にこの問題についてのトック、フラートンの見解に対してマルクスが行っている批判を見ておくこととする。なお次稿では併せて、標題の問題と関連してゐるさき一つの問題の解決を試みておくこととする。

(未完、五・二七)

## 附 論——宇野教授の反駁に答えて

利子論はいかに展開されるべきでないかについて

宇野弘蔵教授がその『経済原論』のなかで示されたところの「利子論」の誤りについては本誌前号の「利子生み資本小論（承前）」においてささか詳しく取扱ひするほどに述べておいたのであって、これ以上教授の「利子論」について書くことは私にとってはなほだ気の進まない仕事なのであるが、教授が反駁を本誌に寄せて来られ、その内容がいちぢるしく誤謬に満ちたものであるので、左にお答えしておくこととする。

### 一

教授は最初に頁をさいて「マルクスの利子論に対する私の疑問」を述べておられる。これは直接にはマルクスにた

して向けられたものであって私に向けられたものではないが、私に向けられた反駁とその態度ならびに内容において関連もあるので、触れておこう。

教授は、マルクスが第三卷第五篇第二十一章の最初のところで与えている利子生み資本についての説明を長きに亘って引用され、つぎのようにいわれる。「一体、ここにいわれている機能資本家と資本所有者との対立は理論的には如何にして発生したものと解してよいのであろう」（本誌、五頁）と。ところがマルクスのこの説明は、見られるように、まさにそのことについても説明を与えているものなのである。マルクスはここで、産業資本、産業利潤と商業資本、商業利潤との考察を土台として——これはそれらの成立を土台としてといってもよい——、「貨幣は資本制生産の基礎上では資本に転化せらるる」、つまり「資本として機能するという使用価値」を受けとることを述べ、ついで、したがって「百ポンドを自由に処分しうる人々は、二十ポンドの利潤を生産する力を所有する」とし、「もしこの人が、これを現実に資本として充用する他の人に委譲するならば」、と説明しているのであって、差し当っては——というのは以下第二十四章にいたるまでの間にこのことをさらに発展させて考察しているからである——これ以上明確に機能資本家と資本所有者との対立が「理論的には如何にして発生した」かを説明することは、「理論的に不可能なのである」。

ところが教授はいわれる、——マルクスは利潤の利子と企業者利得とへの分裂を「最初からかかるものとして前提して」かかっていると（五頁）。とすれば第二十一章から第二十四章までの間で一体なにをマルクスは書いているのであろうか。この間で一体なにを教授は読まれたのであろうか!? 教授の「利子論」なるものにおいてはいきなり信用の問題——マルクスはこれを第二十五章以下で扱っている——を混入せしめているばかりでなく、マルクスがそこで

屢々述べていることをほとんどともに取上げておられないのであるが、『資本論』において利子生み資本についての一般的な説明——したがってまた利子論——を展開しているのは、まさにこの四つの章においてなのである。

マルクスが説明しているところを「長々と」引用されながら、しかもかつ、「一体、ここでいわれている機能資本家と資本所有者との対立は理論的には如何にして発生したものと解してよいのであるか」というように、いかにもマルクスの欠陥を衝いて教授によってはじめてかかる問題提起がなされたかのようにいわれたり、マルクスはかかる対立を「最初からかかるものとして前提して」かかっているといわれたりする！ 現実に「常識的に」利潤が利子と企業者利得とに分裂しているとしても「しかし理論的には」(宇野教授はまことに深刻な「理論家」ではある！) 最初からかかるものとして前提してよいことにはならない！「マルクスにあっては、或いはそういう前提を許すことになるのかも知れない」(まったく見当ちがいの想像、マルクスにとってはぜんぜん無縁な憶測)！マルクスのような論じ方では「体制的に外部的なものとせられていたものが入って来るのを避け得なくなつて来ているのではないだろうか」(六頁)！方法論的にいって、いきなり信用の問題を混入せしめている教授が、マルクスの所説には「具体的な諸關係が混入している」(六頁)と非難される！これらは一体どういう奇現象だと考えたらよいのであろうか(註)。

(註) 宇野教授は冒頭において、「利子論」を展開するに当ってはつぎのような研究方法が採られるべきであるといったことについて述べておられる。すなわち、まず「告白」される、——「私自身も従来一二度解說的研究を試みては見たのであるが、『資本論』の他の部分との関連を考察しないでは一向にその解釋を進め得ないように考えられて来た」(二頁)と。これはまことにものごとなことであつて、教授が従来なされたといわれる「解說的研究」がどんなものであるか知らないが、『資本論』の他の部分との関連を考察しないで「剰余価値の一形態である利子について解説、研究をすることが誤りであることはいふまでもない。ところがこの「告白」にすぐつづいて教授がいわれていることはこうである、——「……考えられて来たのであつ

て、『経済原論』では思い切って私自身の積極的見解を利潤論、地代論を基礎にして展開してみた」と。これはまことに不思議なことであって、従来教授が探っておられた研究方法が右のような大きな欠陥を持っていた上は、まず謙虚に「資本論」の他の部分との関連を「よく「考察」されるべきであった」であり、「思い切って」教授自身の誤った「積極的見解」を展開してみるのは飛躍した、誤ったやり方なのである。上は一見教授の書損ねのようにも読み過ぎるのであるが、『経済原論』での所説を思い合せて見るとそうとは解しえなく、これはやはり書いておられるとおりに受取って、教授がはしくもその不当な研究態度の一端をみずから露出されたものと解すべきなのである。そしてこの『資本論』を読む努力が欠けておられる点は以下にもつぎつきと見られるように教授の『資本論』研究の特徴、根本的欠陥の一つをなすものである。

ところで、マルクスが説明しているところを引用されて、上記の対立が「理論的には如何にして発生した」かを明かにしていない、としてマルクスを非難される教授が、まさにその教授が、マルクスに反対して貸付資本にたいして与えておられる規定がつぎのようなものであることは、これまた一体なんということであろうか。すなわち、——「貨幣を貸付けることが、そしてそれによって利子を得ることが、かかる貨幣の所有者にその貨幣を資本たらしめるのである」（『経済原論』下巻、八頁）。非難者の与えている規定がかかるものであることは、マルクスをして苦笑せしめるに十分であろう、といっただけではすまされないであろう。すなわち、この規定では資本制生産の基礎における利子生み資本——貸付資本といっても同じである——の性格はなんら明かにされていないのであって、これでは、前資本制的な、利子生み資本の古風な形態である高利資本と選ぶところがなくなってしまう。乃至これはしいええば高利資本にこそ妥当する規定なのである。このように近代利子生み資本と高利資本との差異を明確に擱んでおられない——正確にいえば差異を抹殺しておられる——宇野教授が、資本制生産様式の一要素としての利子生み資本の登場を論理的に展開しているマルクスの説明にたいして投げておられる非難が、マルクスは資本制社会における機能資

本家と資本所有者との対立が理論的にいかにして発生したかを明かにしてない、ということなのである！（註）

（註） ここまで書いて来てつぎのことに気が付いた。すなわち、宇野教授は近代的利子生み資本と高利資本との差異が分らない。だから第五篇の最初に述べている近代的利子生み資本についてのマルクスの説明を讀まれても、それが近代的利子生み資本の説明だと分らない。だから「体制的に外部的なものとせられていたものが入って来」たと思われた、のであると。こう見るとなぜこのような誤った見解を持たれるにいたったかということが、論理的に一応筋が通って肯けることになる。所詮、誤りの筋道にすぎないのであるが、もし教授が眞に誤りは正そうという意図を持っておられるならば、このことも——ほかに貨幣とか資本とかについて多くのことを知っておられないということが絡み合っているが——よく視られるとよいであろう。

教授がここに入れておられる註を見ると、右の誤りはまたつぎのことと関連していることになる。教授によればマルクスは、「単に、商品としての生産物が、その流通過程における売買を、独立の資本によって行われ、という面から商業資本を展開した」（六頁）と。もしマルクスがこれを見たならば、この「面」を規定している文章の、主語がどこにあるかはっきりしなく、受け身の使い方がまったく無視されていること——宇野教授が愛用されるところの——について嘆くであろうことは度外視しても、あれほどこのように解すべきではないと説明しておいたのになおこんな風にしか理解できなかったのかと、慨嘆するにちがいない。第四篇を説明するに当たっていかにマルクスがまず、「商品取扱資本が、まったく、貨幣への転形過程を通過すべき、市場で商品資本としての機能を果すべき、生産者の商品資本以外のなものでもないものであって、ただこの機能が、生産者の附隨的操作としての代りに、いまや資本家の特殊部類たる商品取扱業者の専門的操作として現われ、特殊な投下資本の事業として自立化される、ということだけのことである」（三三〇—三三一頁）ということを屢々説いているかを見られた。

ところがさらに宇野教授はここで、「マルクスのように単に、……という面から商業資本を展開したのでは、それ

に商人資本（註）と異った資本主義社会内部における規定を与えることは困難になる」（同上頁）といわれているのである。宇野教授がマルクスはこう説明しているといわれているその説明は、マルクスの説明とは似もつかぬものであって、それは前期的商業資本にこそ妥当する説明であるから、近代的商業資本を説明しうるものではない。「困難なる」ことは当り前なのである。だが、マルクスがこんな「展開」の仕方をしているのではないのにたいして、そう「展開した」とされ、そう「展開したのでは」「困難」が起るといわれる。まことにもってなんと評すべきか言葉に迷うのである。

（註）宇野教授は「商人資本」という語を前期的な商業資本の意味に用い、「商業資本」と區別して用いておられるようである。なお、マルクスは *Kaufmännisches Kapital*, *Kaufmannskapital* をこのような意味に用いていないことはいうまでもない。

教授はマルクスを論じていわれる、——「実際には資本主義の発展は、旧来の商人資本、金貸資本をして可なり重要な役割をなすものとしてその内に機能せしめつつ行われたとしても、理論的には「またしても宇野教授は深刻な「理論家」ではある」これをそのままに反映して展開するわけにはゆかない」（マルクス曰く、私はけつしてそのように「反映して展開」してはおりません）。それはむしろ貨幣の資本への転化に際して、資本の一般的規定の一面をなすものとして取りいれ得るに過ぎない」（マルクス曰く、私は「貨幣の資本への転化」にさいして宇野教授のように「資本の一般的規定の一面をなすものとして取りいれ」なかったし、また「取りいれ得る」とはけつして考えません」（同上頁）。ところが、ことはもつと奇怪になつてゆくのである。教授はいわれる、——「商業資本としては、かくの如き商人資本が単に転化したものとしてではなく、産業資本自身の内から発展するものとして説かれなければならない——少くとも私の理解する理論



的展開はかくなければ、首尾一貫しないものと考えるのである」(同上頁)と。だが、近代的商業資本を「産業資本自身の内から発展するものとして」展開しなければならぬと主張し、そしてかく展開したのが、ほかならぬマルクスの商業資本論なのである。マルクスがいわぬことをマルクスがいったと云う、——マルクスを誤読してまたは歪曲してこう云っていることは世間にしばしば見かけることである。マルクスがいわぬことをいったと押しつけてマルクスを非難する、——これもマルクス「批判」者の間で珍しきことではなし。だが、マルクスがいわぬことをいったと云い、マルクスがいつていることを「私の」見解とし、もってマルクスを非難する！ こういうことは私の狭い見聞では宇野教授をもって嚆矢とする。もはやことは経済学の問題ではなく、道義の問題であると考えられる。

だがまだことは終りでなく、そのさきがあるのである。宇野教授は口では商業資本を「産業資本自身の内から発展するものとして」展開すべきであるとしておられるが、実際に正しくそう展開しておられるかというところではないのである。『経済原論』では商業資本は「貸付資本」の形成を前提として説かれ、またその「貸付資本」はいきなり信用の問題を混入せしめて説かれているという、途方もない方法を採用しておられるのである。つまり、マルクスは商業資本を産業資本の転化した形態として展開しているのにたいして、宇野教授は「産業資本自身の内から発展するものとして」展開しておられないのである。

このように宇野教授は、利子生み資本についても商業資本についても、ほぼ同様なきわめて奇怪なマルクス非難をされたのち、「三宅氏の批評にうつる」とされる。マルクスにたいして右のごとくであると同じく、私にたいする反駁もまたもにお答えるのもどうかと思われるほどのものであって、『資本論』を(あるいは拙稿「利子生み資本小論」を)いま一度念を入れて読まれることを希望しておくにとどめたいのであるが、とにかく、なるべく多少とも

『資本論』を読む上の参考ともなりうるように——対象に制約されるのでなかなか思うようにはゆかないが——取り上げてゆきたい。

二

その前に、マルクスは「貸付資本の形成過程と共にその規定を曖昧にする」(一〇頁)と非難される宇野教授は、「三宅氏の批評とも関連すること」であるがとして、いま一つ「マルクスの利子論に対する私の疑問」を挙げ、そして「私にとってはこの点が根本的な問題なのである」といっておられる。それはこういうことである。——「マルクスは『貨幣は、それが貨幣として有する使用価値のほかに、一つの追加的使用価値、すなわち資本として機能するという使用価値を受けとる』と云々、『貨幣は商品——といっても独自の種類の商品となる』と規定して、直ちにまた『同じことに帰着するが、資本は資本として商品となる』といっている。貨幣が商品となると資本が商品となるということとを、貨幣が資本主義社会においては資本に転化されるものとして、またそれによって剰余価値の一部分を分与せられるものとなることから、直ちに同一視してよいか、どうか。それは資本に対するマルクスの規定と矛盾することはないか」云々(七頁)。

私も宇野教授がこの点を理解しえないでおられることがその所説の内容の根本的な欠陥であると思う。右で「三宅氏の批評とも関連する」といわれているのは、私がマルクスの見地に立って教授を批判しているからなのであるが、拙稿「利子生み資本小論」において、川合一郎氏を批判したさいにも宇野教授を批判したさいにも、この点については諸所で述べておいたのであるが、マルクスが多くの紙幅を使って述べていても分らない方には私の説明もお分りに

ならなかったらしい。したがってここでまた述べても徒勞であろうかとも思われるが、下手ではあるがなるべく懇切に——教授が他の箇所で示しておられることをもいくつか引張って来て——御説明をしておこう。

たとえば、教授が『経済原論』下巻二四五頁で「『銀行から資金の融通を受ける産業資本は』——引用者」直接貸付を受けるとした場合にもまた資本自身を貸付けられるというのではない」ということを主張せんとして書かれた文章を批判したさい、私は一つの問を設け、これにたいして答えるためには教授も、「貸手から借手に貨幣が譲渡——貸付の形態で——されるさいつねに貨幣「資本となっているのは誤り」はかかる性質、つまり利潤を生み出すという性質をもつものとして譲渡されるのである」、「貨幣はここで、資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されるのである」ということを認めざるをえなくなる、「しかしもしそう答えるならば、教授としては大へん困ったことになられるであろう」、といった追究の方法を採ったのであるが、それについて教授は、「資本が商品となるのではなくて貨幣が商品となる」という私は、『大へん困ったことになる』だろうというのであるが、私は一向に困らない」というのは、困るべき所以についてなにも御存知ないという単純な理由からである」。氏自身の言葉でも『貨幣は、資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引される』というのであって、貨幣が一定の規定の下に商品として売買されていることは明白ではないか」(一一頁)というように、逆に私をやり込めたつもりでさえおられる。

まず、上掲のように教授はマルクスにたいして、「貨幣が商品となる」というのと資本が商品となるということとを……直ちに同一視してよいか」といわれるのであるが、「貨幣が商品となる」というとき、貨幣がどういう規定性において商品となるのか、商品となりうるのか、を考えて見られるとよい。貨幣は貨幣としての規定性においては、商品とはなりえないのである(註)。商品とは貨幣に転形されなければならないものであるから、いかに貨幣は魔

物であるからといって、自らを自らに転形するなどということができる道理がないのである。宇野教授は、マルクスは貨幣が商品となるといふまた資本が商品となるとして「同一視」している、といわれているが、マルクスは決して「貨幣が商品となる」といふ文章は書いていないのであり、書く道理がないのである。引用するまでもないがこゝは、*"In dieser Eigenschaft als mögliches Kapital, als Mittel zur Produktion des Profits, wird es Ware, aber eine Ware sui generis [eigenen Art]"* (Ⅲ. S. 371) と書かれたものであつて、この in が肝腎なのであり、それを除いて *wird es Ware* だけを取り出して一つの命題とするのはなんとも乱暴なことなのである。

(註) この貨幣としての規定性における貨幣について疑問があれば、拙稿「貨幣」(理論社刊、講座『資本論の解明』第二分冊所収)の「(一)「貨幣」を理解するための前提」とくに「(1)「貨幣」の研究方法」を参照されたい。

貨幣はここで「可能資本としての、利潤を生産するための手段としての属性において」商品となる。そういう規定性において商品となるのであつて、けつして貨幣としての規定性において商品となるのではない。このように利子生み資本においては、貨幣は資本として機能するという規定性において商品となる、——ということは、資本として機能するという規定性における貨幣が商品となる、といいかえても同じである。ところで、資本として機能するという規定性における貨幣はいいかえれば資本としての貨幣であり、かんたんにいえば資本にほかならない。資本が商品となるという資本とは、かかる意味なのである。

だから、ことは「資本が商品となるのではなくて貨幣が商品となるという私は……一向に困らない」などとすまして込んではいられないはずなのであり、また、マルクスは貨幣が貨幣としての規定性において「商品となる」などと

は考えていないのであるから、いたがって「資本が商品となる」ということと「直ちに同一視」などはなにもしてゐないのである。三宅氏の言葉を見ても「貨幣が一定の規定の下に商品として売買されていることは明白ではないか」といわれているが、その規定性が問題なのである。「同一視」しているのは、マルクスであるか宇野教授であるか。

なお、宇野教授が資本が商品となるということを理解しえないでおられることは直接には関係がないことであるが、さきに引用したドイツ文に続けて『資本論』ではこうなっている。——“Oder was auf dasselbe hinarbeitet, Kapital als Kapital wird zur Ware.” 長谷部氏はこれを「または、同じことに帰着するが、資本は資本として商品となる」と訳しておられるが——高島訳も同様——、私はこの Kapital als Kapital は Geld als Kapital の誤記ではないかと思つてゐる。なぜならば、上からの説明の運び方を見ると、資本制生産の基礎上では貨幣は資本として機能するという使用価値を受けとる、可能的資本としてのこの属性において貨幣は商品となる、と説明して来ているのであり、同じことに帰着するがとしてただちに続ける場合には、かかる属性においてをかかる属性におけるとし、かかる属性に於ける貨幣が、つまり資本としての貨幣が、商品となる、というべきところである、と考えられるからであり、二つには原文どおりであれば、「資本としての資本」と読まれるのが普通ではなからうかと思われるからである。「資本が資本として商品となる」と読むと意味はもちろん通るが、続き工合として最初の「資本」の出がすこし唐突のように感ぜられる。なお『剰余価値学説史』では同じことを説明してゐるときつぎのように述べてゐる。——“Da auf Grundlage der kapitalistischen Produktion eine bestimmte Wertsumme, in Geld oder Waren dargestellt——eigentlich in Geld, der verwandelten Form der Ware——, die Macht gibt, ein bestimmtes Quantum Arbeit gratis aus den Arbeitern auszu ziehen, bestimmten Mehrwert,

Mehrarbeit, Mehrprodukt sich anzuzeigen — so ist es klar, daß das Geld selbst als Kapital verkauft werden kann, aber als eine Ware sui generis, oder das Kapital in der Form von Ware oder Geld gekauft werden kann.” (第三卷、ディーン版、五二四頁、邦訳全集版、五一七頁)。この「も」 oder ではまことにたくさんに「い」かえていくにすぎないのである。

宇野教授は貨幣としての規定性における貨幣について正確な把握をしておられない、したがってそれと資本としての規定性における貨幣との区別を理解されえないのでおられるのであるが、それに加えて教授は、資本とは「価値の運動体」であると一図に思いつめておられるから、利子生み資本において資本が商品となる、ここで取引されるのは資本という商品であるということが分らなくなるのである。一たび資本制生産様式が与えられており、等量の資本は等量の利潤をもたらすという基礎の上では、貨幣はすでに過程に入る前に資本として——可能的資本として——存在しているのである。利子生み資本においてあらたに生じることが、この資本としての貨幣がかかる性格において取引される、商品となるということであって、このことが利子生み資本の特性をなすのである。資本が産業資本、商業資本として授下される場合、市場において資本は、その貨幣資本は、貨幣としてしか機能しない。AからBに貨幣が手離されるさい、それはたんに貨幣として商品を購入するために手離されるにすぎない。ところが利子生み資本においては貨幣が資本としての規定性において手離される。資本がそのまま資本として手離される。資本が商品となる。——かくて資本の物化が完成された形で現われる。要するに問題はこれらのことを正確に掴むことにつきてゐるのである。

資本が商品となる、ということが利子生み資本においてはじめて生じることであるということを説明するために、前々号でも前号でも——抜いたり足したりして——マルクスのつぎのような説明を引用しておいたのであるが、くり返

して引いておこう。——「資本は流通過程では商品資本および貨幣資本として機能する。だが、この兩形態では、資本は資本として商品になることはない」(Aber in beiden Formen wird das Kapital nicht als Kapital zur Ware)。……流通行為においては、商品資本は、資本としてではなく、商品としてのみ機能する。……同様に、それ「資本——長谷部氏は「貨幣」としておられるがこの『』は資本である。ここまでは資本が商品資本として機能するさいを見て来たのであり、ここで資本が貨幣資本として機能するさいを見ているのである。もっとも「貨幣」と解しても、右の続き工合を別とすれば、文章の意味が通じないわけではない、ほとんど同じに通じる」が貨幣資本として作用するのも事実上ではただ單純に貨幣として——すなわち、商品(生産諸要素)の購買手段として——にすぎない。この貨幣がここでは同時に貨幣資本であり、資本の一形態であるということは、購買という行為から、貨幣資本がここで貨幣として果たす現実的機能から、生じるのではなく、この行為と資本の總運動との関連から生じるのである。というのは、けだし、貨幣資本が貨幣として果たすこの行為は資本制生産過程を導入するからである。……どちらの場合にも、かれは、商品を單純に商品として、貨幣を單純に貨幣として、商品の購買手段として、譲渡するのである。資本が流通過程で資本として登場するのは、全経過の関連においてのみである。……だが、利子生み資本については事情が異なるのであって、このことこそ利子生み資本の独自の性格をなす。自分の貨幣を利子生み資本として増殖しようとする貨幣所有者は、これを第三者に譲渡し、流通に投じ、これを資本としての商品たらしめる。……それは、それを譲渡する者にとって資本本であるばかりでなく、それは最初から資本として、剰余価値つまり利潤を創造するという使用価値をもつ価値として、第三者に譲渡される」(Ⅲ三七四—六頁、傍点—三宅)。

マルクスのある説明——宇野教授による引用を参照されたい——にたいしての教授の「疑問」、——「貸手Aにとつ  
附論、宇野教授の反駁に答える

の資本が、何故に資金としての貨幣であってはならないのか（一八頁）。答、——この間は教授の「資金論」が前号で見たように、貨幣で貨幣を買う、といった無意味な結果に終っているのであるから、自然消失しなければならない。教授の間、——『或る特定の期間のあいだ手離し、貸付け』る貨幣そのものが、どうしてAからBの手に資本として渡されるものとしなければならないのか（同上頁）。答、——Aは貨幣を手離すが、しかし貨幣として、つまり商品を買うために手離すのではないからである。教授の間、——「Aにとっては貨幣を手渡すだけで資本となるということと貨幣の資本への現実的転化はBの手で初めて行われるという関係を、貨幣を資本として手離すと何故いわなければならないか」（〇〇頁）。答、——マルクスがここで「貨幣を、貨幣としてではなく、資本として手離す」といっているのは右のような意味においてであるから、なにもこういう「関係」を指しているのではない。ちなみに、「貨幣が最初から資本として譲渡される」といふとき、それは貸手にたいして利子をもたらすという意味で貸手にとって資本であるばかりでなく、利潤を生み出す使用価値をもつものとして、これを使用する他人にとっても資本として機能するものとして、譲渡される。このことはこの貨幣が取引されるさいの規定性であるから、借手がそれを資本として需要しようとしまいと、資本として使用しようとしまいとにかかわらない——これは前々号の「利子生み資本小論」のなかで述べておいた説明なのであるが、いたずらに反駁の焦慮にかられるよりも落着いて文章を読まれたならば、右のような質問をされることをすくなくとも躊躇されたであろうかと思われる。Bの手ではじめて貨幣の資本への現実的転化が行われる。これは貸付けた貨幣の資本への現実的転化である。しかしAにとつては手渡すだけである現実的転化から独立して、利子をもたらされる。マルクスはここで利子生み資本においてはG—G'という運動がこれらの間の媒介過程から独立しているということを指摘しているのである。教授の間、——「貨幣は手離すにしても、資



本自身の所有はAにあると解して、どうしていけないのか。マルクスのようにこの資本に対するAの所有を特に『その同じ貨幣の法律的所有者でなくなっているではない』という風に何故いわなければならないのか（同上頁）、「貸手から借手に委譲される貨幣を……資本といったのでは、貸手の貸付資本に対する所有関係が明らかにされないことになる」（一九頁）。答、——手離すのは貨幣にちがいはないが、教授のように貨幣として手離すとすれば、その貨幣にたいする所有権も移ってしまうから、Aの手に返済されることはない。つまり教授のように考えるならば、「貸手の貸付資本にたいする所有関係」は「明らかに」されるどころか消滅してしまうのである。資本として一定期間手離したからこそ所有権を移転してないのであり、Aは貸付資本家たるのである。Aは貨幣を手離し、その資本として機能する使用価値を一定期間Bに譲渡したのであるから——かかる使用価値を売ったのであるがその貨幣自体は売ったのではない（独自の商品たる所以の一つであってこの点勞働力を売る場合と類似している）——、かかる使用価値を手に入れたBを経済上の資本家というと、Aは法律上の資本家となる。Bの手ではじめて貨幣の資本への現実的転化が行われ、それは利潤を伴ってBの手に還流する。だがAは資本の——この貨幣の——についても同じことである——所有は移転してないのであるから、すなわち「その同じ貨幣の法律的所有者でなくなっているではない」のであるから、資本はAの手に戻される。まったく「明らか」ではなからうか。教授の問、——「資本として機能するという（三宅氏流に厳密に言えば機能しうるといわなければならないであろうか）使用価値」を有する貨幣（同上頁）。答、——機能するといっても機能しうるといっても同じことである。というのは、使用価値というのは元来そういうものであるからである。

以上で、利子生み資本において、貨幣が資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引される、資本が

資本として商品となる、という点についての説明を終えることとする。宇野教授は、「マルクスの説くところと異っているということは、私自身も承知の上」であるとされ、「私自身の理論的(?)展開に如何なる無理があるか」を「批判」すべきだ(一八頁)といわれるのであるが、そういった「理論的」展開もさることながら、その前に、既述のようにもつと、『資本論』なり『剰余価値学説史』なりを読む努力を払われ、貨幣について、貨幣と資本との関係について、といった工合に積み重ねられて、その上に立って利子生み資本論の理解を計られることが必要であつたしまつたのである、と考えられる。教授のマルクスにたいする疑問というか非難というかそういったものの「理論的展開」を見ると一重にその感が深いのである。ところでまた、前稿において私はかなり詳細に教授のマルクス「批判」の「理論的」展開の跡を辿り、そこに「如何なる無理があるか」を「批判」しようと試みておいたのであるが、それにたいしては教授はいたすらに憤慨され罵られるだけなのである。そういうことでは話にならないのではなからうか。

### 三

宇野教授は、私が教授の「貸付資本は、資本を貸付けるものとして資本なのではない」という句をきわめて控え目に表現して、「これだけでは判じ物めいた句であつて大へん分かりにくい」と書いたのにたいして、この言葉が「それ自身で意味をなさないと驚きいる」とか、「一々勿体をつけた」とか、三宅の「理解力が分」とか(八頁)いわれて憤慨しておられる。ふたたびかかる迷句にとりあうのは避けたいが、前稿では教授のいわれていることをできるだけ筋が通るように解釈することをもっぱらとしたので触れないでおいたのであるが、右のように反駁されるの

でマルクスのために一言いっておくと、教授はマルクスに反対してこういっておられるのであるが、マルクスは決して、「貸付資本は、資本を貸付けるものとして資本なのである」といったかたことの迷論を吐き出しているのではない。貸付資本が資本であるのは、 $G-G'$ という運動をするからにほかならないのである。

そして教授のこの説明——マルクス批判——は、教授の利子論での誤った考え方を呑み込まないと筋も通しようがないのであるが、それを、呑込めば判じ物めいた感を伴わずに読み下しうると書いたのにたいし、「私の著書を始めから読まれたものでない」（九頁）、読んでいれば分ったことだと得々としておられるのは、なんとも御気の毒で返事のしようがない。そして教授の著書を「なにか辞典でも引かれるような気持で」（同上頁）読んだのかと、しきりに愚弄してかかろうとされるのであるが、「辞典」というものは本来すくなくともなんらかの権威をもっているはずのものであること一寸考えられただけで、とうていそういうことがありうるわけではないこと自明ではなからうか。

こん　つまらぬことはさて置いて、上のような迷論をマルクスに押しつけるのは、教授の「理解力」のしからしめるところであれば止むをえないが、そうでなければマルクスを愚弄するものなのである。

相手の所説を検討するさいはまずどういうことをいっているかを相手の立場に立ってできるだけ正確に捉えることが親切でありかつ必要であるので、私は教授がマルクスに反対しておられる分かりにくい文章を解きほぐしその著書の各所を参照して内面的に脈絡を立て、もってその意味を確めておいたのであるが、教授はなおつぎのことが気にいらぬとされている。第一は、資本は「価値の運動体」であるからそれをたとえば「貨幣」というように「具体的に吾々のつかみ得るものとして考え」るのは「通俗的」である、と教授が考えておられることを、私は教授の「利子」の章のなかの叙述から引いてきておいたのであるが、「そんなこと」は「私の著書を始めから読まれていれば」分ること

とであって「利子論の中で求められる必要のないこと」である（九頁）。と。私は、利子生み資本論においては物ではない社会的諸関係の物化が完成されることをこそ明かにしなければならぬのに、教授が「利子」の章でなおかかる顛倒化を理解しえないでマルクス「批判」を敢行しておられることを確認しておくことが必要であると考えたのである。

第二は、上記の操作によって、教授がマルクスを「批判」しておられる理由は結局、貸付けられた貨幣は機能資本家の手元においてはじめて資本として機能せしめられうるのであり、資本というのは「価値の運動体」であって貨幣それ自身は資本であるのではないからである、ということであることを確め、したがって教授は「このことをマルクスは知らないようであると、あるいは知っているはずであるがこの利子生み資本を説明するさいうっかり忘れたものと見受けられる」と考えられたことになる、と記しておいた。ところが御自分の主張の帰結がこのように明らみに出されたことにたいして、教授ははなはだ激昂される。激昂の一、——三宅は「人の書物を読むのに自分の妄想を加え」た（一七頁）と。だがマルクスに反対して資本を貸付けるわけではないとされた理由が右のごとき理由であることは教授が述べておられることなのである。教授が数行で述べておられるマルクス「批判」文を能うるかぎりたんに調べて、そこでいっておられることがこのことであってほかのことではないことを確めたのちに、私は右のように、しからば教授はマルクスにたいしてかくかく考えられたことになるかと記しておいたのである。「のぼせていられるようである」（同上頁）のはどちらであろうか。激昂の二、——「資本が『価値の運動体』であることを『マルクスは知らないようである』などどうしていえるであろう」（同上頁）と。どうしていえるかというと、資本は「価値の運動体」であるからマルクスのように貸付資本において資本が商品となっているとはいえないと教授がいわれている。

るのであるから、かかる教授の頭腦にとつては、マルクスがそこで資本が商品となるといつているとき、マルクスは資本が「価値の運動体」であることを知らないかうっかり忘れていたかどうか以外ではありえないことになるからである。「馬鹿なことをいうにも程がある」(同上頁)といわれても、私はただ論理に忠実に書いたまでであつて、教授の方で所説を改められないかぎり、私の方ではいたし方がない。附言しておく、前出のように反駁文においても教授みずから「それは資本にたいするマルクスの規定と矛盾することはないか」(七頁)と書いておられる。マルクスが資本が商品となるといつるときマルクスは「資本にたいするマルクスの規定」との矛盾を犯していると教授の眼には映じているのであるから——そしてそれ故にこそマルクスに反対しておられるのである——、マルクスが右のようにいつるとき「資本にたいするマルクスの規定」をマルクスはうっかり忘れていないではいいえないと映じるほかないであろう。もしこう映じないとすれば、一見したところ矛盾しているがなぜマルクスはこういうことをいつているのか、と考え、自分の考えの浅さを正すなりして、教授のようにマルクス「批判」をすることはないのである。「人からかつていつるとしか考えられなう」(一七頁)といわれるのであるが、この激昂ぶりはマルクスならば *dies ist etwas unverschämte* とうとうところである。

教授が、ただ御自分の主張の帰結が明るみに出されたにすぎないのに——明るみに出されて見ると大へん奇妙なものであるにちがいないが——、それにたいして憤慨されるという、私には解せない態度を示しておられるのは、ここばかりでない。「資金」論議のところでも、また私が資本の物化を教授が理解しておられないと述べたことについても、同様な態度を示しておられるのである。このようなことを論じるのはあまりに生産的なことでないから避けたいが、論理的に思考されようとしないうことは教授の所説の根本的な欠陥の一つであると考えられるので止むなく

触れている次第である。

#### 四

前稿において私は、宇野教授が「その『資金の』貸付に対して利子が支払われるのは、この資金によって資本力が増進せられ、一定量の自己資本による剰余価値の生産が増加せられるからである」と述べておられるのについて、ここで増加した剰余価値は、借入れた貨幣を資本として機能せしめそれによって生産され取得されたものと本来見るべきであって、借入れた以外の自己資本によって生産されたものと見るべきではないから、この「一定量の自己資本による」という句の挿入はすこぶる不審であると記しておいた。このような誤りをこれ以上取上げることがは大人気ないように思ったので、右の注意を記しておくにとどめたのであったが、宇野教授は右の注意にたいして「独断」(一〇頁)であり、「こんなことで人の書いたものを批評できるわけがない」、「下らぬことをいう」(同上頁)と大へん激昂しておられる。実のところ私は、御自分のこんな「下らぬ」誤りを取上げたこと「下らぬことをいう」と云っておられるのかと、そしてそれにしても解せない憤慨のされ方もあるものかと思つたのであるが、そうではなく、こんな立派な独創的なことを「何故に私が」そう「いつているかを考えて見られるとよい」(同上頁)としておられるのである。

そしてこれを批判する私は、「元来、貸付が多かれ少かれ自己資本をもつて資本家的経営をなしているものになされるものであるということを全然考えられていない」(同上頁)のだという妙な非難をされる。私はマルクスと同様に、利子形成については出発点として、一方の人は資本を貸すだけであり他方の人はこれを生産的に充用する、という純粹な姿で考察すべきであると考へている。——そしてその上に立つて、自己資本にたいしてもまた利子が計算される

ということ、かくして「利子と企業者利得とは、相異なる人物に分配される利潤の分け前であるばかりでなく、二つの相異なる利潤範疇である」(四四一〇頁)ことを明かにすべきである、と考えている。だからまして、宇野教授のよろに最初から「貸付」が「自己資本をもって資本家的經營をなしているものになされる」といった考察をするのは、理論的考察の順序上まったく余計なことをいきなり混入することになると考えているが、しかし自己資本を持っている貸付を受ける場合がないと考えているわけではもとよりない。しかしその場合、借受けた資本を合体して、全体の剰余価値量が増大するのを、「一定量の自己資本による剰余価値の生産が増加せられる」と見るべきではなく、この増加分は借受けた資本によって生産され取得されたものと本来見るべきだ、といったまでのことなのである。教授が「自己資本の利潤率」(同上頁)ということを考えようとするならば、まず右のこと自体を明かに把握——というほどむずかしいことではないが——した上でなされねばならないのである。こんなことを宇野教授が諒解されないならば、それこそ「こんなことで人の書いたものを批評できるわけがない」。なお、こんな誤りを固執されるのは、教授にとってはこれが——前稿で確認しておいたように——貸付と手形割引との差異を抹殺せんとするための結節点となっているからなのである。

右でそもそも問題となった『經濟原論』の文章は前掲の「直接貸付を受けるという場合にも、た資本自身が貸付けられるというのではない」ということを主張せんとして書かれたものであった。そこで私は、実際に「剰余価値の生産が増加せられ」なくとも、借手はつねに利子を支払わねばならない——資本制的基础上ではじめてかかることが「公正さ」をもって要求される——ことになぜなるか、という点を指摘することによって、貨幣がここでは資本として機能するという使用価値をもつ商品として取引されること、つまりはじめから資本として取引されることに気付か

れることを求めようとしたのであった。ところが宇野教授は、「剰余価値の生産の増加を計ろうとしたができなかったならば、どうなるか」という私の設問にたいして、そのときには「自己資本による剰余価値からでも」教授にとってはずべてが「自己資本による剰余価値」であるはずではなかったか?、或いはまた自己資本そのものを貨幣にしてでも利子は支払われなければならない」と平然と答えられ、「利子が支払われるのは……剰余価値の生産が増加せられるからである」というさきほどの説明との関係など一向に顧慮されていないのである。そして設問の仕方が教授にはお分りにならないかつたらしく、およそ見当ちがいな反問をもいくつか並べておられる。

つぎに「直接貸付」という語は宇野教授の新造語と見受けられるからとして、註を附し、手形割引と區別して、担保貸付および無担保の貸付の意に用いておられるのであらうと記しておいたが、教授は、新造語ではない、そして無担保貸付のことだ、といわれる。宇野教授が新造語であることを認められれば、御本人の意見がもっとも權威あるものであるからそれにしたがって一向に差支えないのであるが、新造語でなく「マルクス自身によるもの」であり、三宅も「恐らく読んでいられることと思う『資本論』にもこう書いてある」(二一—二頁)といわれると、これでは困ることになる。

すなわち、教授はマルクスも「個人信用にたいする直接前貸」といつてゐるではないか、エンゲルスもそういつてゐるといわれ、教授の「無知」(二頁)ではないぞとされる。ところで direkte Vorschüsse auf persönlichen Kredit を「個人信用にたいする……」と解するのは誤訳であつて、「人的信用にたいする……」とでも訳すべきなのであるが、それは措くとしても、Vorschüsse というのは一般に資本を投下する意味に使われている語であつて、とくに貸付の形態での投下に限定されている語ではない。したがつて direkte Vorschüsse に「直接貸付」という訳



語を当てることはできないのである。

つぎになぜここでマルクスが「直接的」といつているかというと、手形の割引のさいには手形の支払人にたいして直接に前貸するのではなく、割引依頼人から手形を買うことによって、つまり間接的な仕方、手形の支払人にたいして前貸することになることに對置していつているのである。したがって「直接的」というのは貸付が無担保であるとか担保付であるとかにはかかわりはないのである。「人的信用にたいする直接的前貸」は無担保貸付にちがいないが、「直接的前貸」が無担保貸付なのではないのである。なおエンゲルスもそういつていると教授が指示しておられる長谷部訳の二四五—六頁にはかかる語の使用は見当らないが、別の箇所——同訳一八七頁——では「もし貨幣が直接に貸付として支出されるならば」という表現をしている。この「直接に」も右に述べた意味で用いられているであって、宇野教授が解されるごとき誤った意味においてでないことはいうまでもない。教授はみずから「無知」ではないぞと反駁されてわざわざ「無知」を示されたことになっているのである。

つぎに、教授が、手形の割引と担保付貸付と無担保貸付との三つの場合を挙げておられるところで無担保貸付について、「いつ」でも本来の銀行にとってはこういう貸付は重要な役割を有するものとはいえないが」といつておられるのにたいして、私は、銀行は無担保貸付などはほとんど行わぬものと思つてゐる人がすくなくないので注意を喚起するために、「『本来の銀行』とはどういう銀行を指しておられるのか明かでないが」として、一例として今日のわが国の事例とか外国においても無担保貸付はけつして重要でないとはいえないとか述べておいた。ところが教授は、かかる銀行は「本来の銀行」ではないからだめだとされるときにも、マルクスも「割引こそは銀行業者の本来の業務である」といつてゐるではないか、「私自身」も「手形の割引を最も重要視したわけである」(二頁)と反駁

しておられる。私は「本来の銀行」が *eigentliche Banken* の意味であれば、資本制生産様式の一要素としての「近代の銀行」のことであると思うが、歴史の変遷を離れて一般的にいうとき、かかる銀行において手形割引、担保付貸付、無担保貸付の三者を並べてとくに無担保貸付を「重要な役割を有するものとはいえない」と註を入れるほどの必然的理由があるとは思えないのである。またここで「手形の割引を最も重要視したわけである」といわれても、それとこれとは問題がちがうのであって、論点は途中で変更されるべきではない。

つぎに、教授が「手形の割引と貸付とを区別するということが無意味だというのは、特に銀行の経営にあってはそうであるが」として、銀行の経営にとつては多少意味があるにしても理論的にはこの区別をすることがあまり意味がないように述べておられるのにたいして、私は賛しえないとして、この区別づけは信用論——科学的信用論——にとつてこそ大きな意義をもつのであり、「銀行の経営」にとつてはむしろ信用論で問題とすべきほどの意義をもっているのではないこと、および、「銀行の経営」にとつてと信用論にとつてとはその区別づけをする観点が大分ことなることを指摘しておいた。これにたいして宇野教授は、「『回収の安全性とか期限の点とか』をその区別の大した基準にしない（『三宅』）というのはどうであろう」（『三頁』）ところが回収の安全性とか期限の点とかは再割引に附しうる点などとともに銀行業者の観点において、割引と貸付とがどういふ点で区別されるかと私が説明していることなのである」とか、「三宅氏によるとすべてが個人的信用に帰着するもののようなのであるが」とか、見当のちがうことをいわれ、揚句、「一般に無担保貸付と割引との（銀行の経営にとつての）区別づけを捨てるわけにはゆかないのである」（同上頁）と見得を切っておられる。話はまことに不思議であり支離滅裂である。「銀行の経営」にとつては「無意味だ」というのではないが」として、手形割引と貸付とを区別することに大して意味を認めておられない教授が、私がこれに賛しえないと

するや、「区別づけを捨てるわけにはゆかな」くなったり、「割引も資金を貸付けるという点では、直接貸付〔無担保貸付—三宅〕と何等異なるものではない」(同上頁)としてなぜ兩者を区別するかという基本的な点を抹殺される教授が、「無担保貸付を重要であるというわけにはゆかな」(二二頁)「手形の割引を最も重要視」するといわれるのである。そして御叮嚀に「最後に今一つ」として、そこでは図らずも「直接的貸付〔無担保貸付〕が重要な役割をもつものの様に考えたのであった」(二三頁)りされるのである。

## 五

つぎに「資本の価値」について。宇野教授はマルクスは利子は「資本の価値」だといっているがそうではなく「資金の(貨幣の)価値」(一)であるとして置いている。私は、マルクスの与えている規定としてとくに括弧を附して「利子は『資本の価値』ではなく」などというのは妥当でない、——とくにマルクスの利子生み資本論を批判しようというのであるからにはもうすこし正確に読まれねばならぬ、と考えたのであるが、教授はこれをつぎのように押切ろうとされる。——「資本が商品化されるというのであれば、利子を『資本の価値』として……考えて一向にさしつかえがない」(一四頁)、「もともと資本にしても、貨幣にしても、それが商品化した場合にその価格といっても〔貨幣の価格〕、その価値といっても無理な表現なのである〔だからといって投げやりはどう云ってもいいということにはならない〕。その点さえハッキリしていればこんな言葉に何もそう驚くことはない」〔言葉〕に驚いたのではなく、乱暴な『資本論』の読み方を驚くべきと云ったのである」(一五頁)。

問題は宇野教授がどう「考えて」おられるかなどということではなく、マルクスが利子に与えている説明として附論、宇野教授の反駁に答える

「資本の価値」と括弧つきで示すことが妥当かどうかである。教授は問題を右のように押切ろうとされた上で、つぎのようにいわれる、——「マルクス自身の言葉としても、それを適切な言葉として使用したか否かは別として、使用されていなくともいえない」（同上頁）と。こんなことを言っているのは見てもいいことではない。ところで教授は「適切な言葉として使用したか否かは別として」というように曖昧化を計られるのであるが、「マルクス自身の言葉として」マルクスが利子を資本の価値と云っている箇所だとして教授が挙げておられる例の第一は、教授も認められるようにオーヴァーストーンが資本の価値と云っているのを受けて使っているものである——したがってなんのために挙げておられるのか分らない。第二の「貨幣資本のこの価値減少」の「価値減少」は *Entwertung* の訳なのである。そしてここでは「利子率が低落すれば」貨幣資本の増殖力が減じる——これを貨幣資本の価値減少、減価といっているのである——がこれは主に預金者の負担となる云々と述べているのであり、べつに「資本が商品化されるというのであれば、利子を『資本の価値』として一向にさしかえがない」という宇野教授の所説を裏付けているものではない。第三の例は、第一と同様に、今度はウィルソンが資本の価値と云っているのを受けて使っているものである。かくて全滅となる。「適切な言葉として使用」していない言葉をもって、マルクスを批判するさいにマルクスが利子に与えている規定として示すことが妥当かどうかは、いうまでもあるまい。もっとも教授は最後につき「無理」をしておられる、——私は「マルクスに關聯して使用した」（一六頁）のだと。

なお附言しておく、資本が商品となるとか、その商品の価格が利子だとかいった、ここに現れる諸關係は、単純な商品の立場からすればまったく不合理な (*irrational*) ことなのである。価格とはこの場合ただ代価として支払われるという意味での価格ではない。普通の商品にあっては需要供給が一致すれば価格は価値に一致するが、資本の

価格としての利子にはこういう意味での価値に当るような自然的利子率といったものも存しなく、もっぱら需要供給によって決定される。——だが、この需要供給によって決定されるという点は普通の商品の市場価格とまったく同様なのである。

つぎに宇野教授はつぎのようにいわれる。——「私が『マルクスの所謂貨幣としての貨幣』といったことに対してそういう言葉は『おそらく……エンゲルス宛の手紙の中で……』C・貨幣としての貨幣」といっているのを指しておられるのであらうと思われる」といわれているが、そういう手の込んだ探索をなされないでも、現に問題になっている『資本論』第三巻の第五篇の中で屢々用いられている。私はそれによっただけのことである」(二二頁)と。

私の挙げた手紙は重要な手紙の一つなのであって、教授もマルクス「批判」をされるからには当然この手紙ぐらひは念頭に置かれて「マルクスの所謂」といっておられるのであらうと思つたのであるが、これは私の思いすこしたうたらしく、「手の込んだ探索」と感じられたようである。だがそうだとすると、教授はまたしても誤りを犯しておられることになるのである。

というのは、教授がその「資金」なるものを説明した文章でいわんとされていた「貨幣としての貨幣」は、たとえば蓄蔵貨幣などのように「流通手段としての貨幣と異つて、直接の流通過程から分離、独立された貨幣」を指しておられたのである(『経済原論』下巻、二二二頁)。ところが、「第五篇の中で屢々用いられている」ではないかと教授がいわれ、例を挙げておられる「貨幣としての貨幣」は、いずれも「資本としての貨幣」に對置した意味で用いられているのであって、ただ貨幣という規定性における貨幣、貨幣自身、といったほどの意味なのである。いいかえれば、とくに流通手段と區別しての貨幣という意味は持っていないのである。この点は宇野教授の貨幣論の把握がいかにも

弱そうに見受けられたのでわざわざ註を附して、マルクスはたとえば第一卷の「貨幣の資本への転化」のところで「貨幣としての貨幣」といつているが、これは「資本としての貨幣」と區別して用いつているのであって、上の手紙で書いている「貨幣としての貨幣」とはややことなると注意しておいたのであるが、なぜこんな註が入っているかをも教授は理解しえられなかったわけである。この註で例を第三卷第五篇に採っておけば進んで教授がぼろを出されるに及ばなかったかと惜しまれるが、例をここに採らなかったのは、右の第一卷第四篇では明文で「資本としての貨幣」と對置して用いられていること、ここが『資本論』でこの語を用いている最初であること、第三卷第五篇では多くの場合 Geld als solches とした形で用いられているのであってこれは私は「貨幣自身」とでも訳した方が分かり易いのではないかと考えていること、および簡單化を計ったこと、などのためであった。

これにたいして手紙の「貨幣としての貨幣」は前稿に述べておいたように一寸特別な場合であって、項目の標題の貨幣を(一)価値尺度、(二)流通手段、(三)交換価値の独立的な定在としての貨幣、という順序で考察し、それにそれぞれ「尺度としての貨幣」、「交換手段としての貨幣」、「貨幣としての貨幣」、と記している場合なのである。だからこれは、流通手段と區別しての貨幣であり、交換価値の独立的な定在としての貨幣を指すのであり、また教授のいわんとされている「貨幣としての貨幣」に該当するものなのである。そして手紙を挙げたのは、「貨幣としての貨幣」という語を流通手段と區別しての貨幣の意味で用いている箇所としてここ以外に記憶がないからであった。

「資金」についてのところでの教授のその他の反駁は私の前稿とよく対照されればかんたんに明かであって、取上げらるまでもないので省くが、「大体において貨幣としての貨幣」もやはり貨幣としての規定性における貨幣であるから、これが売買されるという教授の結論は大へん奇妙なことであるので、私は「貨幣で貨幣を買う、なんという徒勞であ

ろうか」として、誤りであることが何人の眼にも明かな形にし、そしてかく指摘しておくにとどめておいたのであるが、こう指摘してもなお教授は諒承されるところではないのである（二三頁）——すなわち、「というようなことをいついて、利子論が果たして展開できるものか、どうかと、あきれざるを得ないのである」！ 諒承されなければ教授の眼にはそう映るのは、もっともなことではあるが。

なお一つ。教授は、「三宅氏の論理には、資金を大体においてマルクスの所謂貨幣としての貨幣にあたるものだといえ、直ぐに『資金』という言葉の代りに『貨幣』としての貨幣』を入れて見たり」すると非難しておられる（二六頁）。私は教授の「理解」にしたがって「資金」という語を「大体において貨幣としての貨幣」と置きかえて——「大体において」も抜かさずに——見たままでなのである。その結果として教授が「貨幣としての貨幣を大体において貨幣としての貨幣として貸付けられる関係から生ずる利子」といった奇妙なことをいわれていることが何人の眼にも明かな形になったからといって、その操作の方を非難されるのは理不尽である。教授は御自分が与えた規定について、または「資金」という語を「便利に使用することができ」（一九頁）る語だと礼讃しておられるその「使用」について、反省されるべきであったのである。私の採った操作は文章の科学性を検証する上にもっとも直截な方法の一つなのであり、教授がいかに非科学的な考察をしておられるかを明るみに出す作用をしているのであって、「全く何のために論議しているのかわからなう」とか「形式的な遊戯としかとれない」とか（二六頁）高飛車に出られて片附くことではないのである。

## 六

以上をもつて、宇野教授のマルクス利子生み資本反対論にたいする私の批判について教授が反駁しておられる部分の検討を終える。教授のマルクス批判が一こうに肯綮を得ていないものであるで、その上に立っての、いわれるところの「私自身の理論的展開」なるものには正直のところあまり興味が無いし、またこれを批判する意義もほとんど感じられない。しかし前稿においては懇切にも、「つけ加えて」として「利子生み資本という範疇の把握失敗の上に築かれた構築物」についてもその論理的欠陥の二三の点を具体的に指摘しておいたのであるが、これにたいしても教授はなお、「論理に如何なる欠陥があるか」といった形で批判が行われていないとして不満をいわれる(二六頁)という並々なぬ理解力を示しておられる。本稿においては上のお答えをもって擱筆してよいと考えられるが、そしてすでに紙数も取りすぎているのであるが、しかしこの部分からも拾ってかんたんながら触れておくこととしよう。

教授は、「マルクスの所謂利子生み資本として規定されているものの中には、『貸付資本』から私の所謂『それ自身として利子を生むものとしての資本』に至るまでの展開が一挙になされている」(二三頁)といわれる。これは畢竟、利潤にたいする利子の自立化を、利潤の量的分割の質的分割への転化をマルクスがいかに展開しているかを理解しえないでおられるからにすぎない。

「株券や土地が一定の利子を生むものとして擬制資本化されるとき始めて資本は商品化されて売買される」(『経済原論』下巻、二四八頁)。——これにたいして私は、かかる仮空資本 (fiktives Kapital) の形成は利子生み資本範疇の成立、資本の商品化を前提としてその上につくり上げられるものであることも指摘し、教授にあっては、その前提の成立を否定されながら「擬制資本化」を説いておられるという、右の文章がそもそも拠って立つ論理に致命的な欠陥があることを指摘しておいたのであるが、この欠陥もまた指摘を受けてもなお分ろうとされない。——すなわち、



『利子生み資本範疇の成立』というのが貸付資本で完成せられないというのが三宅氏には『否定』されていることになるらしい(二四頁)と。「擬制資本」のところで「私の所謂『それ自身として利子を生むものとしての資本』なる奇妙なものを説かれることは御隨意であるが、私は『擬制資本』は「資本は商品化されて売買される」ということを前提として展開されるべきものであるとして、方法自体についてまず指摘しているのである。

ところで、株式配当が利子率にしたがって計算され資本化され、株券がかかる相場で売買されるとき、教授にとってはこれによって始めて——教授のいわれるような「物化」や「商品化」ならばこんな廻り途を経なくてもどういう形態の企業についてもその所有名義を譲渡しさえすれば足るようであるが——、「価値の運動体としての資本が商品化する唯一の方法」(二四頁)が与えられる。そして教授にとってはかかる株券の売買は、『価値の運動体』として現実の資本の移転」(二五頁)であって、それは「国債や社債」などのように「最早や現実の資本の運動から遊離した貸付資本の「？」運動をなすものの移転に過ぎない」(同上頁)ものではない！そしてマルクスや三宅は「こんな簡単なことが考えられないくせに」(同上頁)なにをいうかといわれるのである。教授は試みに株の売買をして見られるとよいかもしれない。そうすれば、いかに株券のたんなる売買が「現実の資本の移転」——つまり教授のいわれる「資本の商品化」——となるかならないか、そしてその相場がいかに現実資本の運動から遊離して変動するかを、知られることができるかもしれない。あるいはどこかの「株式会社」の支配的株主でいられるのかもしれない。なおまた、教授のような理解をされては、国債や社債の売買と株券の売買との差異も、株券の社債化傾向も、ことごとく正しく掴むことができないのである。

前稿においてはマルクスの利子生み資本を誤って理解している一つの見本として好箇のものであったので教授の所

説を詳しく取扱ったのであるが、図らずもふたたびかかる説について書くにいたった。マルクスの利子生み資本論にたいする教授の非難についてはすでに論議の余地はまったくないと私には考えられるし、加うるに教授の議論においては、繰返しようように、『資本論』を正確に読み取ろうとする努力を欠いておられ、かつ御自身の思考を論理的に整理することを欠いておられる、と見る以外に辻褄の合せようがないことがきわめて多く、しかも批判にたいしてはしきりに感情的言辞を振廻されて自説を「固執」しておられるので、本稿でもある部分はどう考えても生産的な仕事ではないと思ひながら書いた次第であつて、この問題についてこれ以上教授と論議しても仕方がないかと考えられる。「お互に無駄をはぶく」ために一言、念のために附加えたい。なお、文中、先学にたいする礼を失するところがあつたとすれば、お許しを乞ひたい。